

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第339集

矢神遺跡発掘調査報告書

二戸市緊急地方道整備事業川又地区関連遺跡発掘調査



(財) 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

矢神遺跡発掘調査報告書

二戸市緊急地方道整備事業川又地区関連遺跡発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されております。これら多くの先人たちの創造してきた文化遺産を保存し、後世に伝えて行くことは、県民に課せられた責務であります。

一方では、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な施策であります。発掘により遺構が消滅することはまことに惜しいことではありますが、その反面それまで間に包まれていた先人の営みに光明が当たるのも事実であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、(財)岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する処置をとってきました。

本書は、二戸市福岡字矢神地区の「緊急地方道整備事業川又地区」の施行にともなって平成11年度に発掘調査を実施した矢神遺跡の調査結果をまとめたものであります。遺跡は、縄文時代を主体としたもので後期の堅穴住居跡や土坑などが確認され、同時期と思われる土器も出土しております。このことは多くの遺跡が発掘されている二戸市の中で比較的調査例の少ない白鳥川流域において貴重な資料となりうるものと思います。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する关心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご援助を賜りました二戸市役所はじめとする関係機関、関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成12年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 船越昭治

例　　言

1. 本書は、緊急地方道整備事業川又地区に係る二戸市福岡字矢神128に所在する矢神遺跡の発掘調査報告書である。本遺跡の岩手県遺跡台帳番号はJF00-2114である。
2. 発掘調査は平成11年4月6日～5月31日に実施され、室内整理は11月1日～1月31日まで行われた。
　　調査面積は1465m²である。
3. 今回の発掘調査による成果の一部は、平成11年度の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第340集の「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」にて公表してきたが、本書を正式な報告書とする。
4. 発掘調査および整理は、鳥居達人・中田迪が担当した。
5. 執筆・編集でⅠ調査に至る経過は委託者、その他は鳥居達人が執筆し編集は主に鳥居達人が担当した。
6. 航空写真・基準点測量および鑑定業務は次の方々に依頼した。(敬称略)

航空写真	株式会社ハイマーテック
基準点測量	株式会社ハイマーテック
石質鑑定	花崗岩研究会
7. 本報告書挿図中に使用した土色表記は、農林省農林水産技術会議事務局、財團法人日本色彩研究所色票票監修「新版標準土色帖」9版1989年を使用した。
8. 調査および本報告書で使用した地図は、国土地理院発行「一戸」5万分の1の地形図である。
9. 野外調査の作業には地元二戸市の方々からご協力をいただいた。
10. 発掘調査による出土品および記録資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

目 次

序

例言

本 文

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の環境	4
1. 遺跡の位置と地理的環境	4
2. 地形と地質	4
3. 周辺の遺跡	8
4. 基本層序	10
III 野外調査と整理の方法	11
1. 野外調査	11
2. 室内整理	12
IV 検出遺構と出土遺物	15
1. 縄文時代	15
2. その他の時代	23
3. 出土遺物	33
V まとめ	43
1. 遺構	43
2. 遺物	44

図 版

第1図 岩手県全図	2	第13図 1号竪穴建物状遺構	24
第2図 遺跡位置図	3	第14図 墓塚・集石小土坑	26
第3図 地形区分図	5	第15図 柱穴①ア図・イ図	27
第4図 周辺の地形と調査区	7	第16図 柱穴②ウ図・エ図	28
第5図 周辺の遺跡図	9	第17図 柱穴③オ図・カ図・キ図	29
第6図 基本層序	10	第18図 柱穴④ク図	30
第7図 グリッド設定図・凡例	13	第19図 出土遺物(1)遺構内出土土器①	35
第8図 遺構配置図(C・D・E区)	14	第20図 出土遺物(2)遺構内出土土器②	36
第9図 2号竪穴住居跡・1号炉跡	17	第21図 出土遺物(3)遺構内出土土器③	37
第10図 4号・5号竪穴住居跡	18	第22図 出土遺物(4)遺構外出土土器①	38
第11図 1・2・5号土坑	20	第23図 出土遺物(5)遺構外出土土器②土製品	39
第12図 6・7・10・11号土坑	22	第24図 出土遺物(6)石器・石製品	40

表

表1 周辺の遺跡表	9	表3 石器一覧表	40
表2 柱穴観察表①	31	表4 遺構内出土土器・土製品	41
表3 柱穴観察表②	32	表5 遺構外出土土器一覧表	42

写真図版

写真図版1 遺跡遠景(空中写真)	47	写真図版9 墓塚・集石小土坑	55
写真図版2 調査前風景・基本層序	48	写真図版10 柱穴①	56
写真図版3 2号竪穴住居跡	49	写真図版11 柱穴②遺物出土状況	57
写真図版4 1号炉跡(3号竪穴住居跡)・4号竪穴住居	50	写真図版12 遺構内出土土器①	58
写真図版5 5号竪穴住居跡	51	写真図版13 遺構内出土土器②	59
写真図版6 1・2・5号土坑	52	写真図版14 遺構外出土土器	60
写真図版7 6・7・10・11号土坑	53	写真図版15 土製品・石器・石製品	61
写真図版8 1号竪穴建物状遺構	54		

I 調査に至る経過

矢神遺跡は、「緊急地方道整備事業川又地区」の街路整備工事に伴い、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

都市計画道路岩谷橋川又線「緊急地方道整備事業川又地区」は、二戸市と九戸村、鞋木町および久慈市方面を結ぶ二戸市街地の幹線道路であり、二戸都市圏の骨格を形成する路線である。

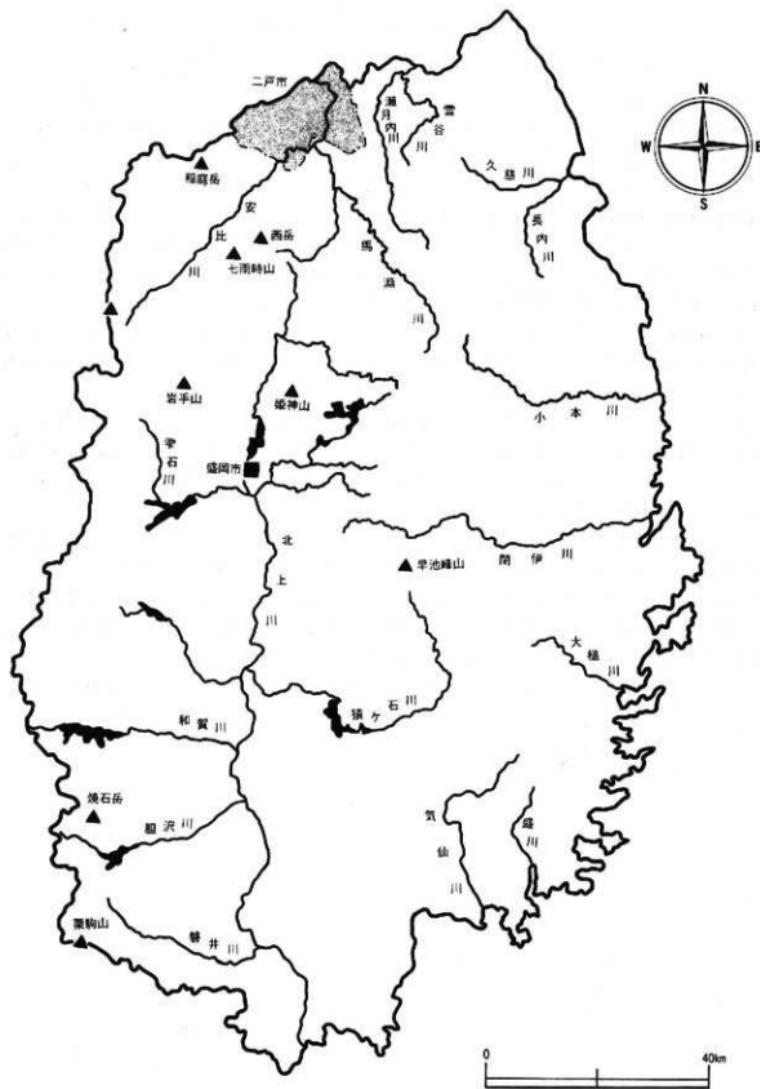
当該路線の沿線には、二戸市役所をはじめ高等学校、中学校等の公共施設も多く、さらに、東北新幹線盛岡以北の整備に併せ新幹線二戸駅を利用する久慈地方生活圏からの連絡道路として位置づけられているルートであるが、現況は歩道もなく幅員も狭い状況であった。このため、今後増大が予想される交通の円滑な処理と歩行者の安全確保および地域活性化の観点から、早期の道路整備が必要となっている。当該工区は、本路線の4期工事として平成7年度に事業採択され、平成11年度で5年目となる。

当事業の施工にかかる埋蔵文化財の取扱いについては、二戸地方振興局土木部から平成10年4月24日付け二戸土第285号「街路整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」の文書により、岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行なった。

依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成10年5月28日に試掘調査を実施したが、その結果は平成10年6月29日付け教文第398号「川又地区街路整備事業に関する埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」の文書において、二戸地方振興局土木部へ回答し、その際西側^{1/2}については工事着手可、残り^{1/2}については、調査可能となり次第、再度協議が必要と付記された。

回答を受けた二戸地方振興局土木部では、平成10年6月30日二戸土第676号「埋蔵文化財に係る試掘調査日程について」の文書により、岩手県教育委員会に対して再度試掘調査の依頼をした。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成10年8月18日～19日に試掘調査を実施したが、その結果は平成10年8月26日付け教文第583号「二戸市川又地区街路事業に係る埋蔵文化財試掘調査について（回答）」の文書において、二戸地方振興局土木部に回答し、その際に矢神遺跡の本発掘調査を要する旨が付記された。

そして、平成11年4月6日から、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われた。



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡位置図

II 遺跡の環境と立地

1 遺跡の位置と地理的環境 (第1・2図)

矢神遺跡の所在する二戸市は県の最北端にあり、東は九戸郡軽米町・九戸村、南は二戸郡一戸町・浄法寺町、北から西にかけては青森県三戸郡名川町・三戸町・田子町に接する。折爪岳を頂点とする北上高地が東側を、奥羽山脈の支脈山地が西をさえぎりその間を馬瀬川が北流する。

遺跡はJR二戸駅から北東3kmに位置し、北緯40°11' 東経141°19'付近にある。広義の北上山系に属し、馬瀬川の支流である白鳥川の北側に広がる。遺跡の西側には馬瀬川と白鳥川の合流地点の自然の要害たる場所に築城されたであろう九戸城跡がある。

調査区は北側河岸段丘の末端に位置し、白鳥川に急激に落ち込むところにある。現況は住宅地や畠地で、宅地の造成のために厚く盛り土を施している区域がある。また上下水道の施設が深く埋められているところ道路造成のために地表面まで削られているところなどあり、近代以降の擾乱が進んでいる観がある。

2 地形と地質 (第3図)

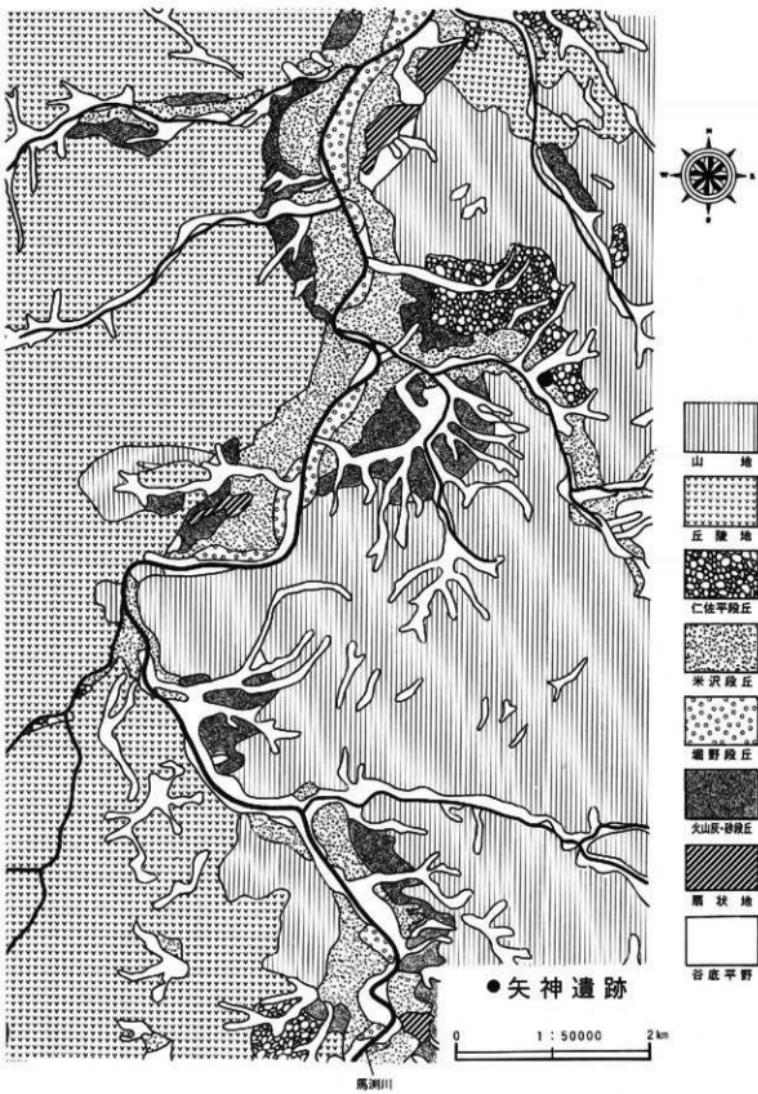
遺跡の西を流れる馬瀬川は北上山地北部にその源を発し一戸町鳥越付近で鋭い渓谷を作り出す。そして八幡平から下る安比川や、折爪岳から流れ出る白鳥川など多くの支流を集め、青森県八戸市を最終地として太平洋へ流れ込む。

二戸市内では馬仙峠などの断崖を作りあげながら緩やかに曲流し、数段の段丘と狭い沖積平野を形成している。

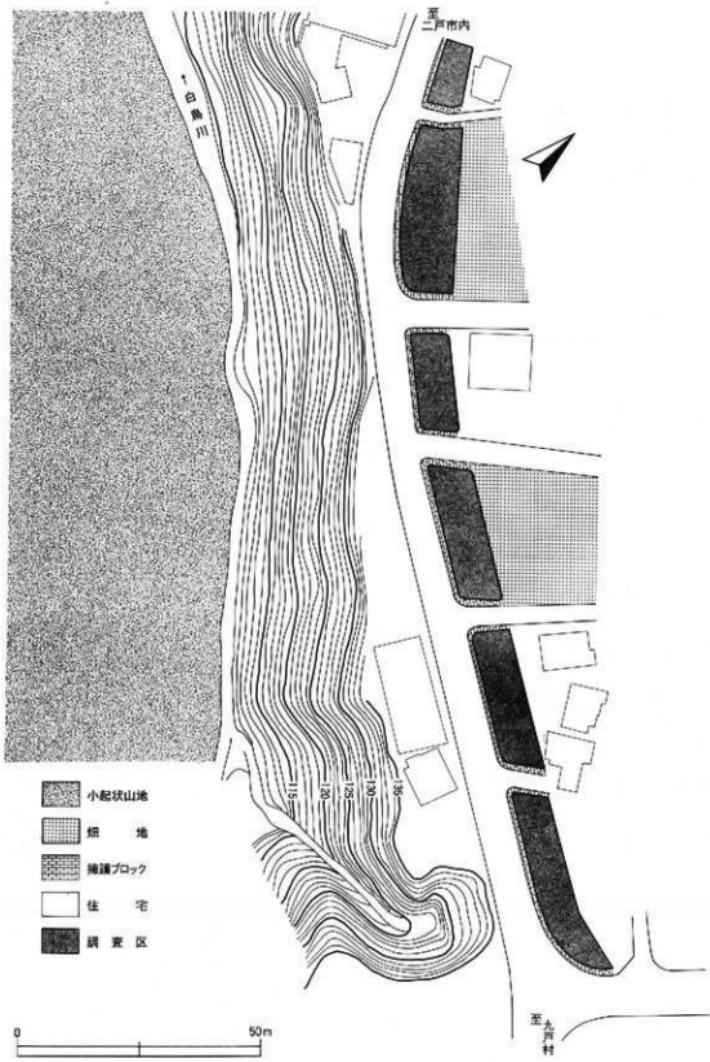
馬瀬川とその支流によって形成されたこれらの段丘は、十和田火山群に起源をもつ噴出物を載せているが間欠的に堆積した火山灰は、地形面や地層を対比するための鍵層となっている。二戸市付近に発達した段丘群は、大池昭二ら(1966)によって上位より仁左平段丘・福岡段丘(洪積世)・米沢段丘・堀野段丘(沖積世)に区分されている。

- 仁左平段丘 標高は140~200mで、チャート・頁岩からなる疊層の上に高館火山灰以上の火山灰を載せる。
- 福岡段丘 標高は110~140mで、八戸火山灰(12700±270yr.B.P.)以上の火山灰を載せ、火山灰流凝灰岩台地の性格を持つ。
- 米沢段丘 標高は100~110mで、新鮮な面を残し、現在では東岸に市街地が形成され、西岸は果樹園や畑地として利用されている。沖積段丘の古期面に当たり、南部浮石(8800±250B.P.)以上の火山灰を載せる。
- 堀野段丘 標高は90~100mで、大池らは南部浮石を載せない段丘であるとしたが、草間(1965)や関(1981)による堀野遺跡の調査で南部浮石層が確認されている。そして、松山力(1981)は、この面と対岸の米沢付近の段丘とを合わせて堀野段丘としている。

矢神遺跡の標高は、133~138mで、4 基本層序 で示すが八戸火山灰を載せることから、上記の区分でいえば福岡段丘に属する。しかし、その占地状況や土地利用状況などを鑑みれば米沢段丘に含まれるかもしれない。事実、上里遺跡の報告書には砂疊段丘Ⅱ(米沢段丘)に属するとされている。ここでは、後述した段丘面にあるとしたい。



第3図 遺跡周辺地形分類図



第4図 周辺の地形と調査区

3 周辺の遺跡（第5図・表1）

二戸市や近隣の町村は遺跡は多い。調査されて数々の歴史学的実績を上げているものもある。一戸町にある御所野遺跡は国の指定史跡にもなっており、また縄文時代に限らなければ二戸市の九戸城跡もその通りである。ここでは本遺跡で検出されている遺構との関連から縄文時代の後期と中世（16世紀ごろ）の遺跡を中心にその前後について述べる。

《縄文時代》 矢神遺跡の近いところでは遺跡から西1kmの白鳥川北段丘に尻子内遺跡(2)がある。発掘調査はされていないが縄文時代後期の土器片が採集できる。二戸市内では岩手県文化振興事業団で調査した上里遺跡(5)や親久保I・II・III・IV遺跡(4)、馬立I・II遺跡(3)などがある。上里遺跡は中期の住居跡は7棟検出されている。親久保II遺跡で検出された縄文時代後期前葉の4棟の住居跡は規模平面形が3~4m前後の大円形を呈すもので、検出された炉はコの字型の石囲い炉である。出土土器は十腰内1式を中心に出土している。馬立遺跡群では縄文時代早期から後期にかけての竪穴住居や土坑などの遺構が数多く検出されている。特に後期初頭の住居跡は矢神遺跡出土土器の時期と重なることから参考になる。

馬立I遺跡では前期初頭から前葉に位置づけられる住居跡が27棟検出されている。後期の資料が乏しかった当地方においてすばらしい成果をあげた。そのすべての住居跡を紹介できないがそのうちの1棟は長軸6mほどの大円形を呈し、炉は地床炉である。その他に検出された住居跡でも地床炉か円形またはコの字型の石囲い炉となっている。それらで出土した土器のうち前十腰内式といわれている土器群は、縄文時代後期初頭の上器編年においてよい参考資料となっている。

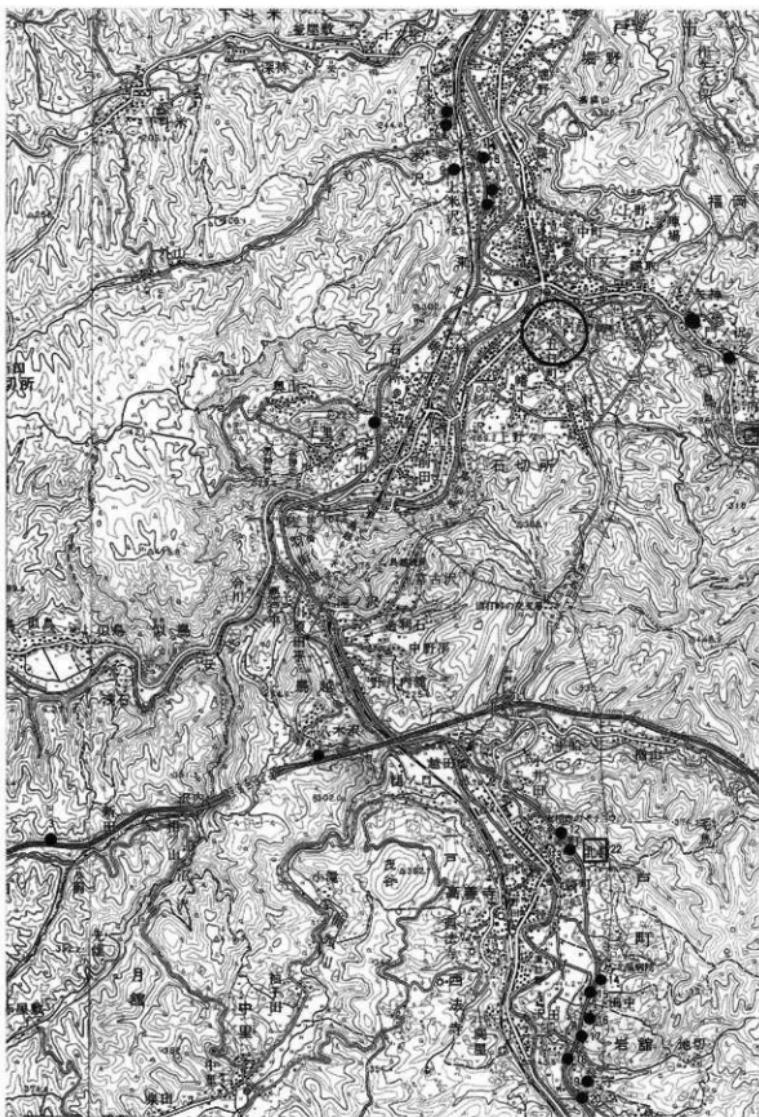
その他二戸市内を見てみると米沢段丘上にある沢内(6) 米沢(7) 下村遺跡(9) や堀野段丘上にある荒谷A(8) 下村B(10 上村遺跡)(11)などがある。下村B遺跡では中期と思われる住居跡のほかに、矢神遺跡でも検出された配石・配石土坑群がある。それらのうち1基に後期初頭の土器が出土している。上村遺跡では中期末葉の住居跡が検出されており、その出土土器は後期初頭への関連が述べられている。

国道4号線一戸バイパスの建設に伴う遺跡の調査は飛躍的に先史時代の様相を解明した。多くの発掘調査例があるが、ここでは12~20をあげている。

北館B遺跡は古代の住居跡が主な遺構であるが、縄文時代の土器片が多く出土している。その中に後期の三角形の区画沈線をもつ土器片もある。子守A遺跡でも同じように波状口線をもつ三角形区画の後期初頭の土器が出土している。

《中世》 当該地方は、天正19（1591）年の「九戸政実の乱」で知られる九戸氏の本拠地で、九戸城跡(1)は国の史跡に指定されていることは既に述べたが、それに伴う遺跡も多い。九戸城跡には石沢館・若狭館などがあり、矢神遺跡の南東の白鳥川北段丘に九戸氏関連と思われる白鳥館跡(20)がある。この館跡は温殿遺跡と登録されており土師の小集落と推定されている。また一戸城跡(21)の発掘調査では堀跡や掘立柱建物跡のほかに数棟の竪穴状遺構が検出されている。横の図は1998年に岩手県文化振興事業団で発掘調査した軽米町の上尾田の館跡の位置図である。九戸氏の関連が考えられる館跡であるが、この館跡の頂部の平場から17棟の竪穴建物跡が検出されている。この建物跡は掘立柱の柱や張り出しを有する。15世紀後半以降とされるこれらの遺構は九戸氏時代のこの地方の生活を考える上で貴重な資料を提供している。





第5図 周辺の遺跡図

表1 周辺の遺跡

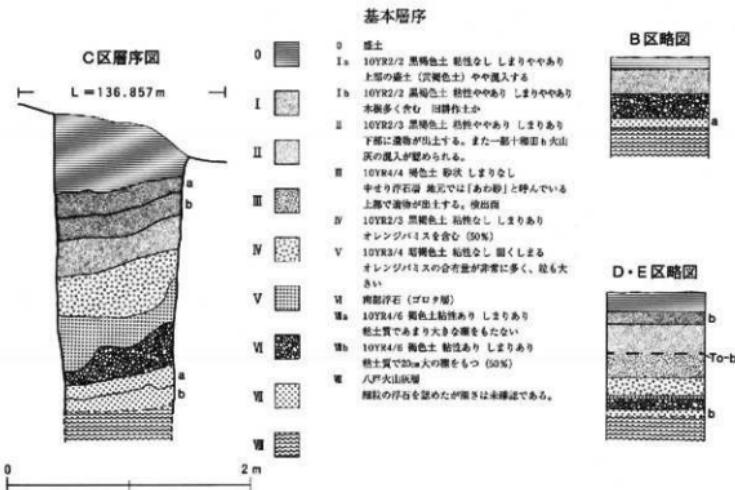
No.	遺跡名	所在	遺跡の性格・遺構・遺物	備考
1	九戸城跡	二戸市	国指定史跡 永祿12年（1569年）九戸政実が居城 寛永11年築城 本丸 二の丸 松の丸 三の丸 若狭館 石沢館	
2	尻子内	二戸市	中期～後期にかけての土器片を採集する	
3	馬立I	二戸市	縄文時代の堅穴住居55棟のうち後期初頭から前葉にかけて 27棟、十腰内1式土器	
4	義久保I・II	一戸町	後期前葉の住居跡	
5	上里	二戸市	縄文時代前期～中期の住居跡 前期のフ拉斯コピットから 7体の人骨出土 集合葬	
6	沢内	二戸市	大木9～10式（新）土器	
7	米沢	二戸市	早期住居跡 大木9式土器片 平安時代堅穴住居跡	
8	荒谷A	二戸市	円筒上層e式～大木9式集落	
9	下村	二戸市	大木10式土器など	
10	下村B	二戸市	後期の配石群、土坑群など	
11	上村	二戸市	大木10式集落	
12	北館A	一戸町	早期～晚期の土器片出土 後期中葉の土器	
13	北館B	一戸町	早期～晚期の土器片出土	
14	田中5	一戸町	大木10式（古中心）集落 堅穴住居6棟	
15	田中4	一戸町	大木10式（新）大洞A式	
16	田中2	一戸町	大木10式（新）集落	
17	田中1	一戸町	大木9～10式集落	
18	馬場平2	一戸町	大木8a～8b式大規模集落	
19	御所野	一戸町	大木8a～10式集落 国指定史跡 集落構成の把握	
20	子守A	一戸町	中期末の住居跡 後期初頭の土器	
21	一戸城跡	一戸町	中世の堅穴状遺構 堀跡 陶磁器 鉄製品	

4 遺跡の基本層序 (第6図)

調査区は南北に長い。その標高差は確認したところでいえば5~6mであるが基盤層は10m弱の差があると推定する。下の図は確認したC区の基本層序図とそれと対応するB・D区の基本層序の略図である。詳しい土色等の特徴は下に付記しているが、厚さや礫の混入具合の違いはあれ、どの区域もVI層以下は同じである。その中でVI層のゴロタ層を見てみると、厚いところで40cm程度の堆積を見るがA区ではすべて失われている。B区はやや残るが数cmと薄く、またC・E区でも中央部分で削平されている箇所がありコンクリートの土台が露出している。ゴロタ面の上を見てみるとバミス(細粒の浮石)を含む暗褐色土層や黒褐色土層が現れる。この土層は区域によってその堆積状況が異なるが、C区では2層合わせて70cmの厚さを確認した。一般にこの層まで遺構が掘り込まれることは少なく、また遺物も出土しない。

遺構が検出されるのはIII層の中せり火山灰起源の褐色土である。III層上部とその上のII層下部で土器や石器が確認される。このIII層が存在するのがC区の一部とD・E区で、その外には確認できない。厚さは区域によって異なるが30cm前後である。

その上には黒褐色土が載るが一部の区域に十和田b火山灰が存在する。そして旧耕作土、盛土もしくは表土となる。盛土の上部には大きな礫が存在し住宅の建築の際に整地されたようである。



第6図 基本層序

III 調査と整理の方法

1 調査方法

(1) グリッドの設定 (第7図)

遺跡の調査範囲は北西から南東にかけて長く、その幅が狭い。通常グリッドはある点を基準とし東西南北で分割するがここではその方法でグリッドが組める状態ではなかった。そこで大グリットを45度ずらして設定した。よってそのグリッド線は南西から北東、南東から北西となる。そして、南西から北東を結ぶ線を北側から順に40mごとにI～IVにわけその中を4mずつ1～10に細分した。南東から北西を結ぶ線は同じく4mずつa～j（一部kが入る）に分けた。

基準点は2ヶ所設定した。その平面直角座標第X系による成果値と杭高（標高）は以下の通りである。

基準点1 X=29640.000m Y=41455.000m 標高=137.156m

基準点2 X=29679.598m Y=41392.775m 標高=133.560m

基準点に応じた補助点の成果値は以下の通りである。

補助点1 X=29628.686m Y=41466.314m 標高=135.888m

補助点2 X=29696.569m Y=41375.804m 標高=133.511m

補助点3 X=29654.142m Y=41423.887m 標高=134.780m

グリッドの設定以前に出土する土器やその土層の把握等のために、便宜的に調査区を横切る5本の市道に区切られた区域を南から北にA～Fに区分している。グリッドではそれぞれの範囲は以下のようになる。

A区 V b-d 1～4 IV b-c 10 B区 IV d-g 1～10

C区 III g-i 1～10 D区 II i-j 7～10 III i-j 7～10

E区 I i-k 6～10 II i-k 1～4 F区 I i-k 2～5

(2) 手掘りと精査

まず土層の把握のためにAから順にトレンチを入れた。その結果、C区が特に表土が厚く2mほどの盛り土を載せることから、遺物の確認をした後に重機による表土除去を行った。B区は重機の侵入が困難なことから手掘りによる表土除去となった。その他は基本的に重機で表土を剥いたのち手掘りで徐々に下げていったが、トレンチ確認で道路・宅地造成のために搬乱を受けている（ゴロタ面まで下げられ、コンクリートなどが散乱している）箇所は慎重に重機で下げた。

精査は、上方の面から層位毎に掘り下げ、遺構検出を行った。基本的には竪穴住居は4分法、土坑等は2分法による覆土の観察を行ったが、広がりをもつ大型住居や重複関係にある遺構等は適宜ベルトを設定した。遺構は、土層断面および平面を写真撮影と実測で記録しながら調査した。

遺構番号は遺構種別毎の検出順に連番としている。遺物の取り上げは、遺構外出土のものはグリッド単位で層位を記入し、遺構内では遺構名と埋土層位を記入して取り上げたが、グリッド位置が明確でない場合のみ、その区域名となっている場合もある。

(3) 遺構の記録

断面図の作成は、遺構の上面に水平の水糸を張って実測の基点を設定して行い、レベルの数値をできるだけ変えないよう意識して実測した。平面図の作成では、基本的に地表面に直角座標系の軸線に合わせて東西、南北に各1mの水糸を張って基線とする簡易造り方による測量法によって実測した。平板による平面図測量も適宜使用した。また、縮尺については20分の1を原則としたが、炉・焼土の断面図・平面図などは

10分の1で実測した。

写真は、遺構検出時の確認状況、埋土堆積状態、遺物出土状況、完掘状態と精査の段階毎に撮影を行った。また遺跡遠景・調査終了全景は航空写真撮影を行った。

(4) 補足

断面図のレベルは通常端数(cm以下)は削除できる方法で実測すべきであるが、調査序盤で出てきた標高の数値(基準点1=119.899m)が誤りであることが中盤でわかり(調査員のミス)実際の標高は、その数値より17.257m高かった。そこで、基準の変更を考えたが、調査の混乱を避けるためにあえて元の数値で実測を続けた。

2 整理方法

(1) 遺構図面

遺構図面は、断面図の標高の修正の後、点検を行い必要に応じて第2原図を作成した。挿図中の縮尺はすべて40分の1であり任意の縮尺についてはスケールに付してある。なお使用したスクリーン・トーンの種類は凡例の通りである。

土層注記は基本層位にローマ数字を用い、遺構埋土にはアラビア数字を用いた。また擾乱はKで表示した。

精査過程あるいは整理段階において欠番になったものや変更になったものもある。変更した遺構は以下の通りであるが、土坑は遺物との関係からできるだけ変えずに登録した。また、柱穴は観察表の中に付している。

3号堅穴住居跡	⇒ 1号炉跡	4号土坑	⇒ 削除
6号堅穴住居跡	⇒ 4号堅穴住居跡	8号土坑	⇒ 1号墓壙
7号堅穴住居跡	⇒ 5号堅穴住居跡	9号土坑	⇒ 2号墓壙
3号土坑	⇒ 3号墓壙	P P 04	⇒ 10号土坑

(2) 遺物

出土した土器・石器・土製品などの遺物は、水洗い・記名の後、出土状況に合わせて遺構内と遺構外に仕分けをし、次いで接合・復元の作業を実施した。復元できた縄文土器は遺構内外問わず、土器片は選別して登録している。石器・土製品は完形品やそれに近いものはすべて登録した。そして、写真撮影を行い実測図・拓影図の作成をし、トレースして報告書に掲載した。

(3) 遺物図版

図版は遺構内外出土遺物は遺構順に、遺構外出土遺物はまとめて種類別に作成して掲載した。挿図中の土器土製品は3分の1とし、石器は2分の1を基本としている。任意の縮尺についてはスケールを付している。

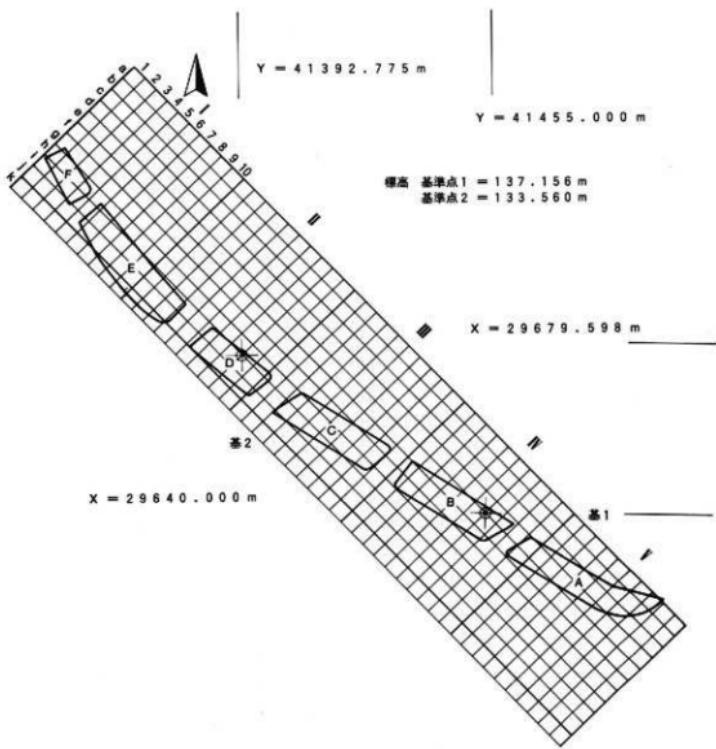
土器・石器等の観察中の法量の推定値は() 残存値は〈 〉で表示した。

実測図の表現方法と計測値の推定は凡例の通りである。

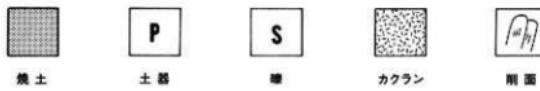
(4) 写真図版

遺構写真は、各遺構の平面・断面を中心に、堅穴住居跡は炉・遺物出土状況等も合わせて掲載した。

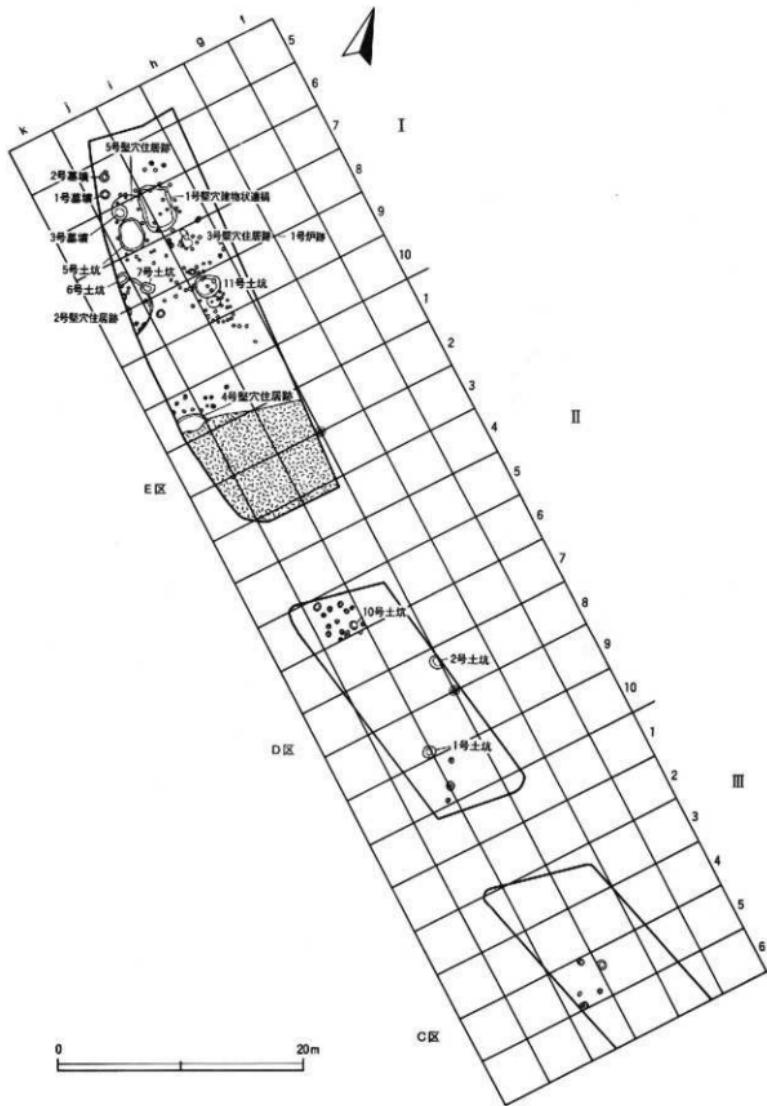
遺物写真では、すべて3分の2で掲載した。



凡例



第7図 グリッド配置図・凡例



第8図 遺構配置図 (C.D.E区)

IV 検出遺構と出土遺物

調査の概要（第8図）

発掘調査区域は南北に細く、そして長い。そのうえ現況が宅地だったところが多くそれらの施設が地中深く埋められていたりして調査は難行した。実際に、調査区域でありながら岩盤まで下げられ宅地となっている区域もあった。ここでは調査区域を市道で区切られた6カ所（A～F）若干の説明をしたい。

A区はもっと南に位置する区域である。現況は宅地で地形的に見ると実際は標高は高いと思われるが、県道の面まで下げられコンクリートが埋められていた。試掘の結果、黒色土・ゴロタ面ともに削られており、遺構・遺物ともに存在しない。標高は135mである。

B区は、黒褐色土（基本層序IV）やゴロタ層が存在する。ゴロタ面で検出したが遺構は存在しない。遺物は少量出土している。ゴロタ面の下には遺構は存在しない。最北端のF区についても同じことが言える。

C区は南側と北側で層位が異なる。南側（グリッドⅢ h i 5～10）は褐色土層（Ⅲ層）が存在せず、B区とおなじような層序になっているが黒色土が厚く1mにも及ぶ。遺構も検出されず、遺物も存在しない。ゴロタ面を斜いで遺構を確認したところ沢状のくぼみを検出した。縄文早期のころと思われるが遺物は出土していない。C区北側（グリッドⅢ h 1・2・3）ではIV層褐色土が存在し遺構の存在が認められた。以下D・E区まで同じ層位である。

C～E区までの遺構の検出は縄文時代の堅穴住居跡3棟、炉跡1基、土坑7基、中世と思われる堅穴建物状遺構1基、その他では近世から近代にかけての墓塚3基、時代不明の柱穴137基である。遺物は調査区E区を中心に縄文土器が大コンテナで2箱出土している。石器などは少ない。

1 縄文時代の遺構と出土遺物

(1) 堅穴住居跡と炉跡

2号堅穴住居跡（第9図・19図〈1～10〉・24図〈1・2〉写真図版3・12〈1～10〉・15〈1・2〉）

調査区北側E区で検出された。グリッドはI j・k・8・9である。検出面はⅢ層（褐色土層）であるが黒色土の面で確認できた唯一の住居跡である。西側半分を県道によって搅乱されている。本遺構は北側で6号土坑、東側で7号土坑を切る。

平面形・規模は隅丸の円形を呈し、長軸は推定5～5m20cm、短軸は4m前後と推測される。主軸方位は、ほぼ北西～南東である。

埋土は、黒褐色土（Ⅱ層）を主体とした自然堆積であるが、搅乱箇所が見られる。

壁はやや直立気味に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい北側で35.2cmを計るがほかは20cmほどである。床は、踏み固められたあとが若干みられるが、溝跡等の施設はない。柱穴は床面に6基、壁面に5基検出されているが、それらの配列は定かではない。しかしP5が比較的大型で住居跡の中心に位置することから主柱穴の可能性がある。

炉は床面のやや南寄り中央に付設されている。半壊して詳細は不明だがやや大型の川原石を円形状に並べた石囲い炉である可能性が高い。

遺物は床面ではなく、すべて埋土からのものであるが、土器片（1～10）と石器（1・2）が出土している。土器はすべて深鉢の破片と思われるが5は壺形土器、6・7は小型鉢の可能性もある。1～5は沈線によって区画されたなかに縄文が充填されるもので、1・2は満巻文に区画され、3・4は三角形状に区画さ

れている。5は壺の体部と思われる破片で、墜落で方形状に区画され沈線をもつものである。6～8は口縁部で平縁で肥厚しているのが特徴的なものである。9・10は肩部の破片であるが、内部がよく磨かれていることが観察される。

石器2点（1・2）は埋土下位からの出土で刃部をていねいに作り出している。

時期は出土遺物から縄文時代後期初頭から前葉に属する。

3号竪穴住居跡＝1号炉跡（第9図・19図〈11～16〉・24図〈3～5〉写真図版4・12〈11～16〉・15〈3～5〉）

調査区北側E区で検出された。グリッドはI i 8で、検出面はⅢ層（褐色土層）であるがややⅢ層を下げたところで検出した。西側で1号住居跡に切られ東側は調査区外となる。また壁や柱穴等は検出できなかつたことから住居跡の規模を把握できず、よって1号炉跡と登録を変更している。

炉跡は埋設土器が付設される複式炉である可能性が高い。石圓い炉は3個体の蹠のみ残るが蹠がはずれたであろう痕跡を残す。それから推定すれば短軸80～90cmほどの規模になろうか。燃焼部の規模は長軸1m、短軸70cmで焼土の厚さは最大20cmを計る。

埋設土器は、Ⅲ層を掘り込むような形で11の粗製土器を逆位にして埋め込まれていた。また焼土の埋土から土器12が出土している。この2つの土器は外部や底部の煤が付着している。

この炉跡の周辺には大小11基の柱穴状の小ピットが存在するが遺構との関係は定かではない。またその周りにも数基の柱穴が存在する。

出土遺物は、土器では13・14が炉を覆う褐色土から、15・16が炉内の焼土下などから出土している。すべて深鉢の口縁部である。

石器は3点（3・4・5）出土している。炉周辺の床面から集中して石質の同じ刺片が8点ほど出土しているが、そのうち比較的の加工が明確なものを取り上げた。

時期は出土遺物から縄文時代後期初頭に属する可能性が高い。

4号竪穴住居跡（第10図・19図〈17〉写真図版4・12〈17〉）

調査区北側E区で検出された。グリッドはII k 1で、検出面はⅢ層（褐色土層）である。南側を市道に西側半分を県道によって破壊されている。

平面形・規模は残り部分から判断すると円形を呈すと思われるが規模は不明である。

埋土は黒褐色土を主体とした自然堆積であり、底位に粒状に黄褐色土が見られる。その粒子は十和田起源の火山灰と思われる。（十和田b火山灰か）

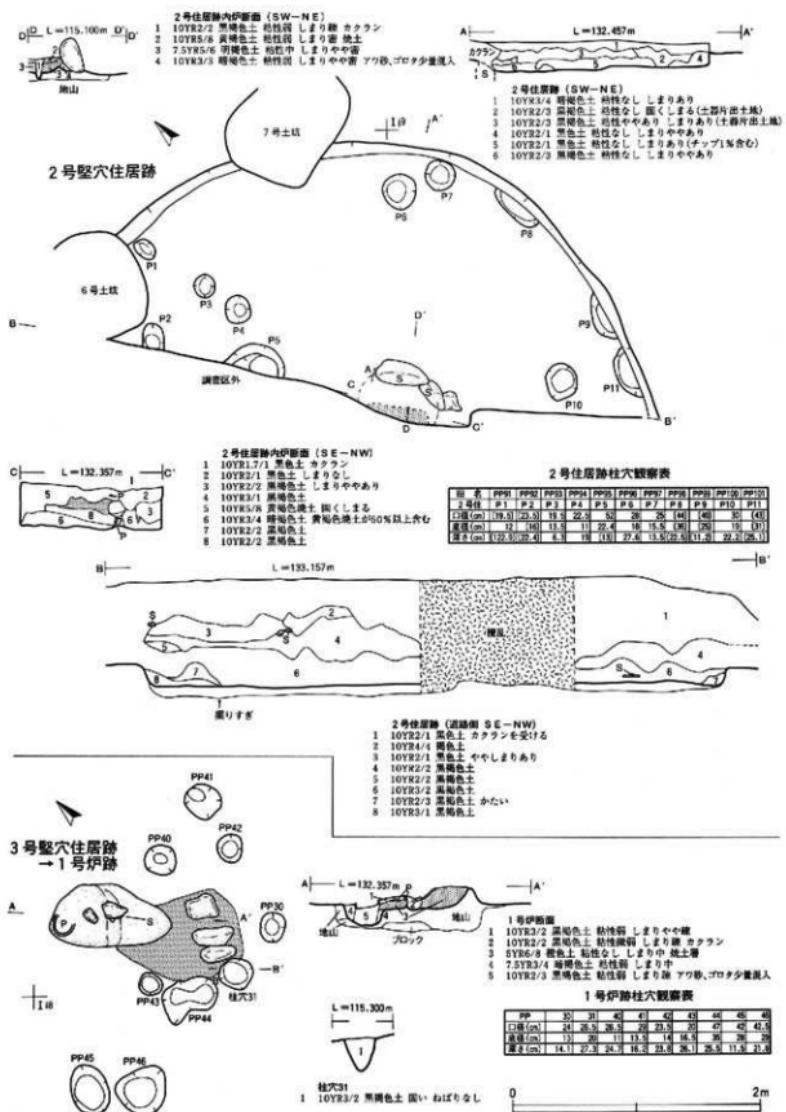
壁はやや直立気味に立ち上がり、北側壁で最も高く45.9cmに及ぶ。床は固くしまるが柱穴や炉跡などの施設は検出されなかった。

出土遺物は埋土から出土した1点のみで単節の斜縄文が充填された沈線によるJもしくはS字形の文様をもつ。

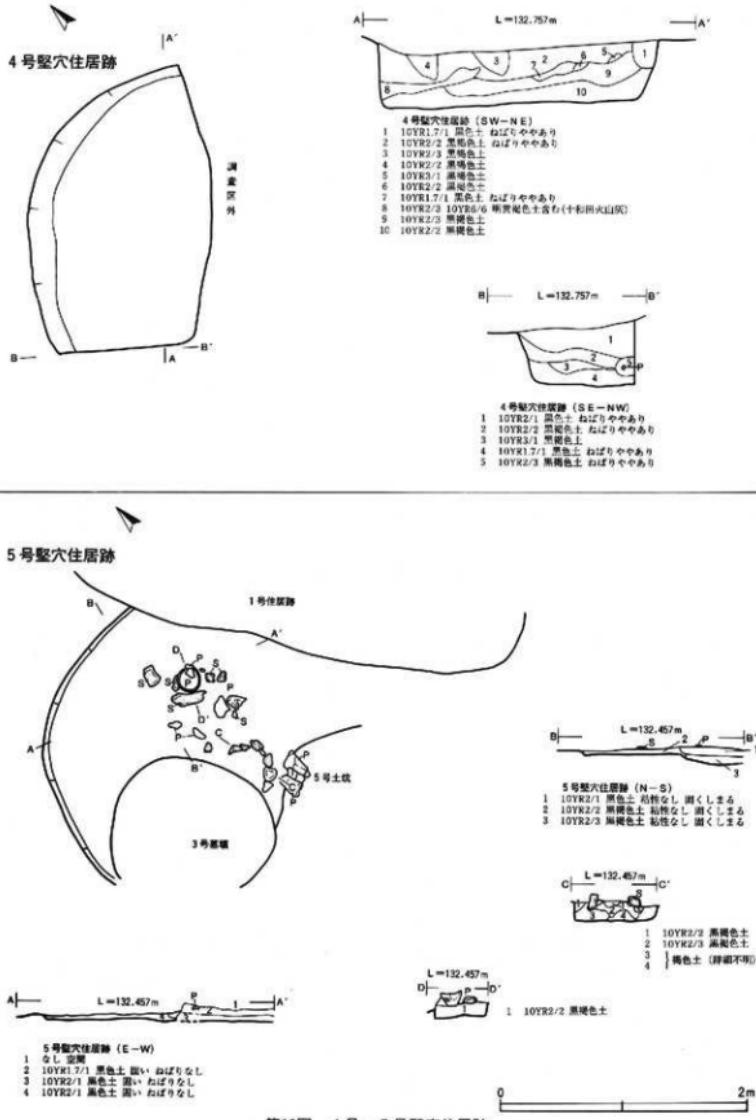
時期は縄文時代後期初頭から前葉に属する可能性が高い。

5号竪穴住居跡（第10図・20図〈18・19〉・21図〈20～28〉写真図版4・12〈18〉・13〈19～28〉）

調査区北側E区で検出された。グリッドはI j 7で、検出面はⅢ層である。遺構の南北側を1号住居跡に、南側を5号土坑に切られる。西側は近代遺構の墓壙に切られている。住居跡全体が失われている観が強



第9図 2号堅穴住居跡・1号炉跡



第10図 4号・5号堅穴住居跡

いが、わずかな床面と炉跡、埋設土器や壁が辛うじて残る。

平面形・規模は把握できないがわずかに残った壁から推測すれば円形であろうと思われる。埋土はごくわずかであり、上部を墓坑などの遺構で擾乱されていると思われる。

壁が残った北西で壁高はわずか5cm足らずで形状は把握しがたい。しかし、わずかに残る床面から炉跡、埋設土器が検出された。

炉跡は10~15cmほどの川原石を円形に配する石囲い炉と思われ、規模は推計で40cmほどと思われる。焼土は検出されず、構築材である礫にも焼成を受けた痕跡はない。

埋設土器は、炉跡からほぼ真北80cmほど離れたところに位置する。10~25cmほどの礫に囲まれるようにして配置されている。明確な掘り込みの痕跡がない。

出土土器は他の遺構のなかで最も多い。18の床面出土土器は、穿孔されている。上部を欠損しているが壺形土器の可能性が高い。隆帶で方形に区画しているのが特徴である。床面出土の19・20は小型の深鉢で三角形状の沈線区画を持ち、19はJ字、20は連続のS字の縄文の充填された文様をもつ。20は小波状の山形口縁であるが、口縁部が欠損した19も同様と予測する。21の深鉢は口縁が折返し状に肥厚している。22・23は深鉢の口縁部で20と同一機種のもの、24は小型の壺形土器の体部でS字文様をもつ。25・26は21と同様に口縁部が肥厚しており、25は平縁である。27は深鉢の28は浅鉢?の底部でそのうち28は上げ底風である。

時期は出土遺物から縄文時代後期初頭から前葉に属する可能性が高い。

(2) 土坑

土坑は7基検出している。時期はすべて縄文時代後期に属すると考えられる。遺構番号の変更はⅢで明記しているが、その詳細については各土坑の説明のなかで述べることとする。そのなかで4号土坑はE区の最北部で登録されたものであるが、精査の結果木根による擾乱と判明し、登録を抹消している。

1号土坑（第11図・13図(29) 写真図版6・13(29)）

調査区D区グリッドⅡ i 8付近で検出した。検出面はⅢ層。東側を調査区外に切られ、埋土はⅡ層をレンズ状にもつ自然堆積で、断面形は皿状である。

平面形・規模は不整な円形と推測され、開口部径1m12cmを計る。深さは最大でも27.5cmと浅い。

出土遺物は29の深鉢の底部が埋土の中位から出土している。

2号土坑（第11図・写真図版6）

調査区D区グリッドⅡ j 9で検出した。検出面はⅢ層。埋土は黒褐色土を主体とした自然堆積で、断面形は台形状を呈す。

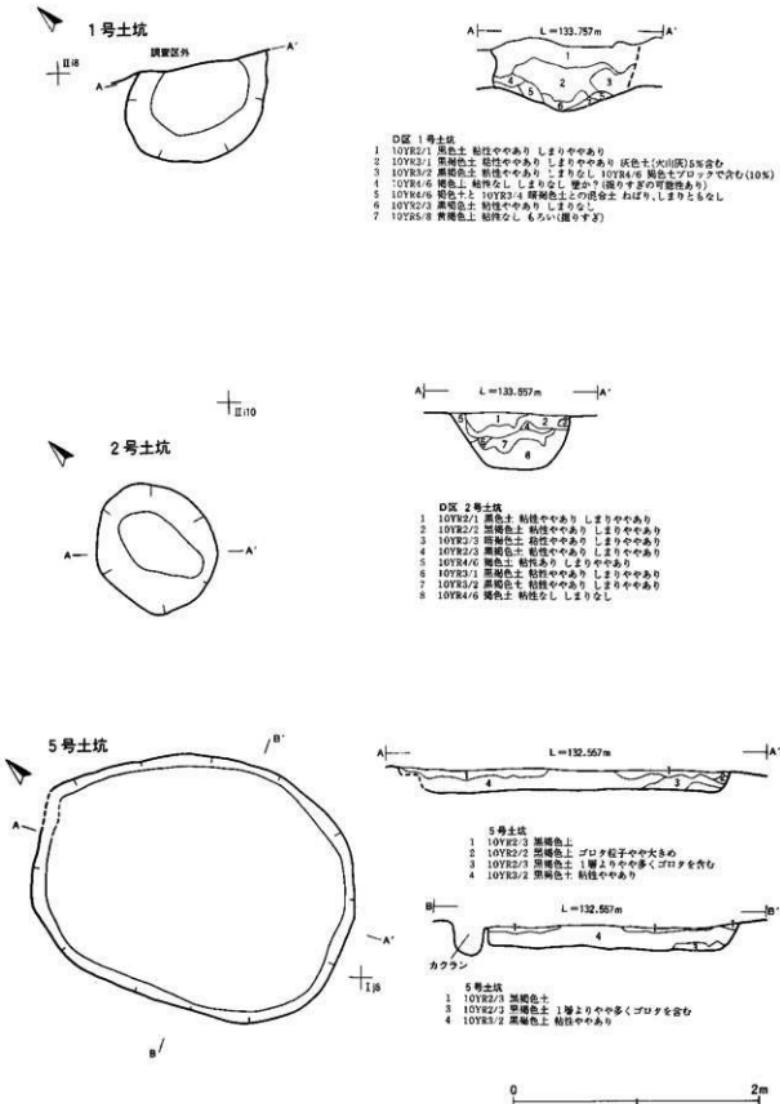
平面形・規模は不整な円形で開口部は1m~1m05cm、深さは最大で40.4cmを計る。

出土遺物はない。

5号土坑（第11図・21図(30)・24図(6) 写真図版6・13(30)・13(19~28)・15(6)）

調査区E区グリッドI j 7で検出した。検出面はⅢ層下で、5号竪穴住居跡の床面と重複する。埋土は黒褐色土主体でゴロタ粒子をやや含む。Ⅳ層をやや掘り込んでいるようである。断面形は皿状。

平面形・規模はだ円形で、開口部は長軸2m66cm、短軸2m08cmを計り、主軸方位はほぼ北一南である。深さは北側で最大22.5cmを計るが平均では18cmと残る。



第11図 1・2・5号土坑

出土遺物は沈線が描かれている土器片(3)と砥石(6)が出土している。

6号土坑（第12図・写真図版7）

調査区E区グリッドI k 8で検出した。検出面はⅢ層で、南側を2号竪穴住居跡に切られる。埋土上部に人为的に埋められていたであろう痕跡と下部は蟹の崩壊土であろう黄褐色土がある。断面形はビーカー状。平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径は約90cmを計る。深さは東壁で最大48.9cmである。
出土遺物はない。

7号土坑（第12図・21図(31) 写真図版7・13(31)）

調査区E区グリッドI j 9で検出した。検出面はⅢ層で、西側を2号竪穴住居跡に切られる。埋土は、人为的堆積であり、基本層序V層（暗褐色土）をもつ。また2号住居跡の壁の一部になっている。断面形はビーカー状を呈す。

平面形・規模はだ円形を呈し、開口部径は最大1m08cmを計り、深さは東壁で最大49.8cmである。
出土遺物は31の土器片が埋土中位から出土しているが、この口縁部は折り返し状に口縁部を肥厚している特徴がある。

10号土坑（柱穴状土坑）（第7図・写真図版7）

調査区D区グリッドII i 8で検出した。検出面はⅢ層である。柱穴P P 4として登録したが、精査中の埋土の観察から10号土坑と変更・登録した。

埋土は自然堆積であるが下部にV層を、中位に火山灰と思われる灰褐色土をもつ。断面形は柱穴状である。

平面形・規模はだ円形を呈し、主軸方位はN-60°-Wで、開口部径は長軸85cm、短軸55cm、深さは最大で50.4cmを計る。

出土遺物はない。

11号土坑（配石土坑）（第7図・21図(32-33) 写真図版7・13(32-33)）

調査区E区グリッド杭I i 9近くで検出した。検出面はⅢ層である。周囲には大小含め20基の柱穴が検出され、中央付近に礫が配置されていたことから住居跡と思われたが土坑状の掘り込みを確認し、11号土坑と登録した。そして、その特徴からは配石土坑とした。

埋土上部に数個の川原石を配しているが、埋め込んでいるように見えない。埋土はゴロタ粒やアワ砂（中揮）粒が混入するもので人为的な埋まり方である。断面形は皿状。

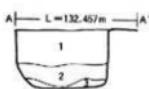
配されている礫は10~25cmの川原石でその配列には規則性は認められない。しかしその礫はすべて土坑の範囲内にあり、土坑との関連は明らかである。

平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径は96cm~1m08cmで、深さは南側壁高で23.7cmである。底面に開口部10cm足らず、深さ10cm程度の柱穴状のくぼみが2基検出されている。

出土遺物は繩文土器片2点である。32は帯状の隆帯に円形の連續刺突文を施す。また33は平縁である。

+1m

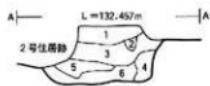
6号土坑



- 6号土坑
1 10YR3/2 黒褐色土
2 10YR4/4 褐色土、面積割合20%ゴロタ混入
3 10YR6/8 明黄褐色土 もろい

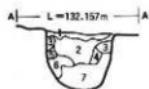
+1m

7号土坑



- 7号土坑
1 10YR3/2 黒褐色土 ねばりあり
2 10YR2/2 黒褐色土 ねばりあり やわらかい
3 10YR2/2 黒褐色土 ねばりあり 2%ゴロタ混入
4 10YR6/8 明黄褐色土 もろい
5 10YR2/3 黒褐色土 粘性やあり ゴロタ1%
6 10YR3/4 明褐色土 粘性ふつう ゴロタ中含む5%

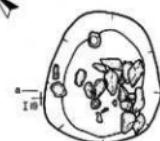
10号土坑



10号土坑

- 1 10YR2/1 黒色土 粘性なし しまりなし 塗化物5%含む
2 10YR2/3 黑褐色土 粘性やあり しまりややくあり 褐色土(砂土)まばらに含む
3 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまりあり 黑褐色土(火山灰)50%含む
4 10YR2/3 黑褐色土 粘性あり しまりあり 黑褐色土(火山灰)50%含む
5 10YR3/4 褐褐色土 粘性なし しまりあり (砂土)小礫を含む
6 10YR2/4 褐褐色土 粘性なし しまりなし
7 10YR2/2 黑褐色土 粘性なし しまりなし (バシス10%)含む ゴロタの上の層

11号土坑



11号土坑

- 1 10YR2/3 棕褐色土 粘性弱い しまりやや硬 アワ粉少量(10%未満)混入
2 10YR2/3 黑褐色土 粘性弱い しまりふつう ゴロタ、アワ粉少量混入
3 10YR3/3 褐褐色土 粘性弱い しまりふつう ゴロタ、アワ粉少量混入



第12図 6・7・10・11土坑

2 その他の遺構

ここでは1で掲げた縄文時代の遺構以外に検出された遺構を一括して取り上げる。そのうち柱穴は縄文時代の遺構である可能性も否定できないが、出土遺物もなく埋土等からも時代を確定するに至らず、ここで取り上げることを申し添えておく。

(1) 中世と思われる遺構

1号竪穴住居跡⇒1号竪穴建物状遺構（第13図・写真図判8）

調査区北側E区で検出された。グリッドはI i・j 7で、検出面はII層（黒褐色土層）の下部ではなくIII層に近い。検出状況はE区任意の試掘の折り、層位にIII層（褐色土層）を確認しないところで固くしまった面と柱穴を検出し、精査の結果、竪穴状に掘り込んでいることが判明した。西側で5号住居跡を東側で3号住居跡を切っている。

平面形・規模は隅丸の長方形を呈し、主軸方位はN-15°-Wである。上場径は長軸3m67cm、短軸2m68cmを計り、深さは西側壁高がもっとも深く49.2cmを計る。

埋土は、遺構の北側に黒色土の自然堆積の部分が見られるが、南側はしまりのない黒褐色土を中心で、人のあるいは擾乱されているかのようである。北-南の断面形は台形状である。

壁は北・東・西壁は、やや外傾して緩やかに立ち上がるのに対して南壁はほかに比べて緩やかにスローブ状に傾斜している。

床はゴロタ面の上部IV層を掘り込んでいる可能性が高く、床面は整地されていない。

カマド・焼土等の床施設はないが、柱穴が住居内から6基、壁の周囲に10基検出された。そのうちP 1とP 8、P 3とP 7、P 4とP 6が主柱穴で、P 10・P 11が出入り口に伴うものであると考えることもできる。

出土遺物はなく時代を特定できないが、埋土やその形態から中世の竪穴建物跡と推測する。それが九戸氏との関わりを持つ可能性が高い。

(2) 近世-近代の墓壙（1～3号墓壙）（第14図・写真図判9）

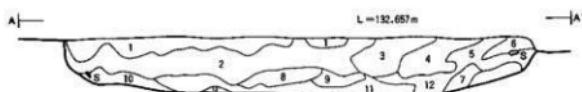
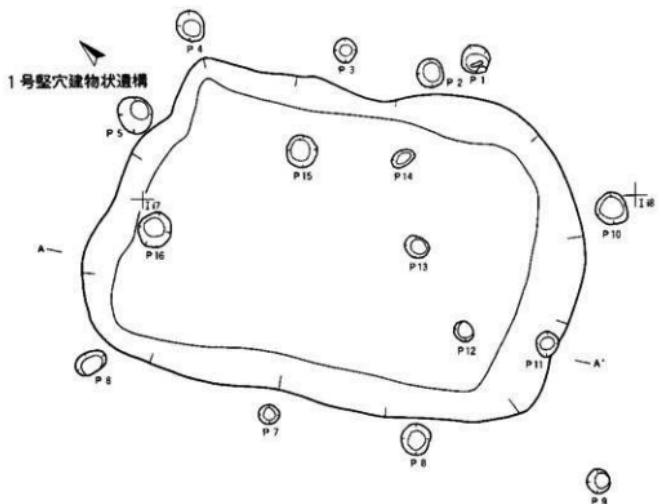
調査区北側E区で3基が検出された。1・2号墓壙はI j 6、3号墓壙はI j 7グリッドのII層の上部で検出した。3号墓壙は5号住居跡を切る。

平面形はいずれも円形で、規模は80cm～1m22cmで3号墓壙がやや大きい。深さは1・2号墓壙が40cm前後、3号墓壙が80cm前後でゴロタ面まで掘り込んでいる。

遺骨は3体出土している。それにともなって貨銭（寛永通宝）・刀子（カマ）・キセルが出土した。これらの出土遺物は遺骨の供養と改葬の際に埋葬した。

これらの墓壙は江戸時代の末期から明治にかけてのものである。

また、3号墓壙の埋土から出土した縄文土器は、遺構外として登録した。



- 1号竪穴建物状遺構
- 1 LOYE2/2 黒褐色土 粘性やあり しまりなし 本根1%含む
 - 2 LOYE2/1 黒褐色土 粘性あり しまりやあり 赤褐色浮石(チップ)2%含む
 - 3 LOYE2/3 黒褐色土 粘性なし しまりなし
 - 4 LOYE2/3 黒褐色土 粘性なし しまりなし(くさ)
 - 5 LOYE3/1 黒褐色土 粘性なし もろく崩れ込み(もろくしまりなし)
 - 6 LOYE3/4 黒褐色土 粘性なし しまりなし ナップ含む
 - 7 LOYE3/4 黒褐色土 粘性なし しまりまったくなし
 - 8 LOYE4/4 黒褐色土 粘性なし 土質
 - 9 LOYE3/4 黒褐色土 粘性なし 土質(もろく)
 - 10 LOYE3/4 黒褐色土 粘性ややあり 固くこまる
 - 11 LOYE3/8 黄褐色土 (地山、固りすぎ) やや粘性をもつ
 - 12 LOYE3/B 黄褐色土 (地山、固りすぎ) やや粘性をもつ

0 2m

1号竪穴建物状遺構柱穴観察表

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8
口 徑(cm)	24.5	22.5	19	26	31	26.5	17	20
底 径(cm)	19	15	10	15.5	16	20.5	10	15.5
深 度(cm)	16.5	15.5	29.8	26.6	32.7	32.3	23.1	25.7

	P 9	P 10	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15	P 16
口 径(cm)	19	26.5	20	17	20.6	21	25.5	26.5
底 径(cm)	12.5	15	12	13.5	15	19	17.5	18.5
深 度(cm)	23.7	25.5	24.7	17.8	13.8	14.3	29.4	21.7

第13図 1号竪穴建物状遺構

(3) 時代不明の遺構

集石小土坑（第14図・写真図判9）

調査区E区グリッド杭I i 9付近で2基（1・2号）検出した。検出面はⅢ層下。埋土はほとんど見られずわずかに暗褐色土もつ程度である。埋土中に5~10cmほどの礫が混入する。

平面形はどちらも円形で、規模は開口部径が1号38cm、2号が54cmで深さはそれぞれ10、20cmである。底部に礫が隙間なく敷かれる特徴がある。

遺物ではなく時代は特定できないが柱の土台のために礫が敷かれた可能性が高い。

柱穴（第15~18図・写真図判10・11）

調査区全体で142号（P P 142）まで登録したが、精査の段階で変更したもの、あるいは削除したもの欠番となったものがあり、表4に明記している。

ここでは、各区域ごと（アーチ）にまとめて報告する。

ア：P P 11~15

C区グリッドⅢ i 5のⅢ層をやや下げたところで検出した。比較的浅めの柱穴状のくぼみが多い。

イ：P P 05~10・21~29

D区グリッドⅡ j 6・7のⅡ層下で検出した。埋土に十和田火山灰を含むものがある。比較的掘り込みは深く大型である。10号土坑と隣接し、縄文時代の遺構である可能性もある。

ウ：P P 01~03

D区グリッドⅡ j 10の2号土坑付近で検出した。上記のアと同じ性質をもつ。

エ：P P 34~37・136~142

E区グリッドI j 7の5号土坑の南側の駄目押しの際に検出した。検出面はⅢ層下。

オ：P P 33・119~128

E区グリッドII k 1の4号住居跡北側で検出した。この区域は擾乱が激しく時代は特定できない。

カ：P P 115~117・129

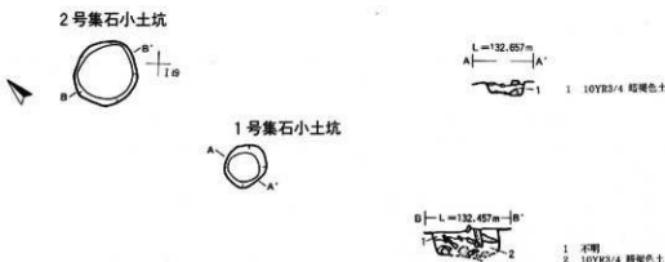
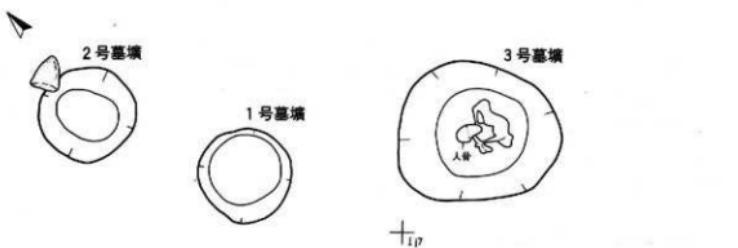
E区グリッドI i 10で検出。この区域も擾乱が激しい。

キ：P P 32・82~89・104~114・132~134

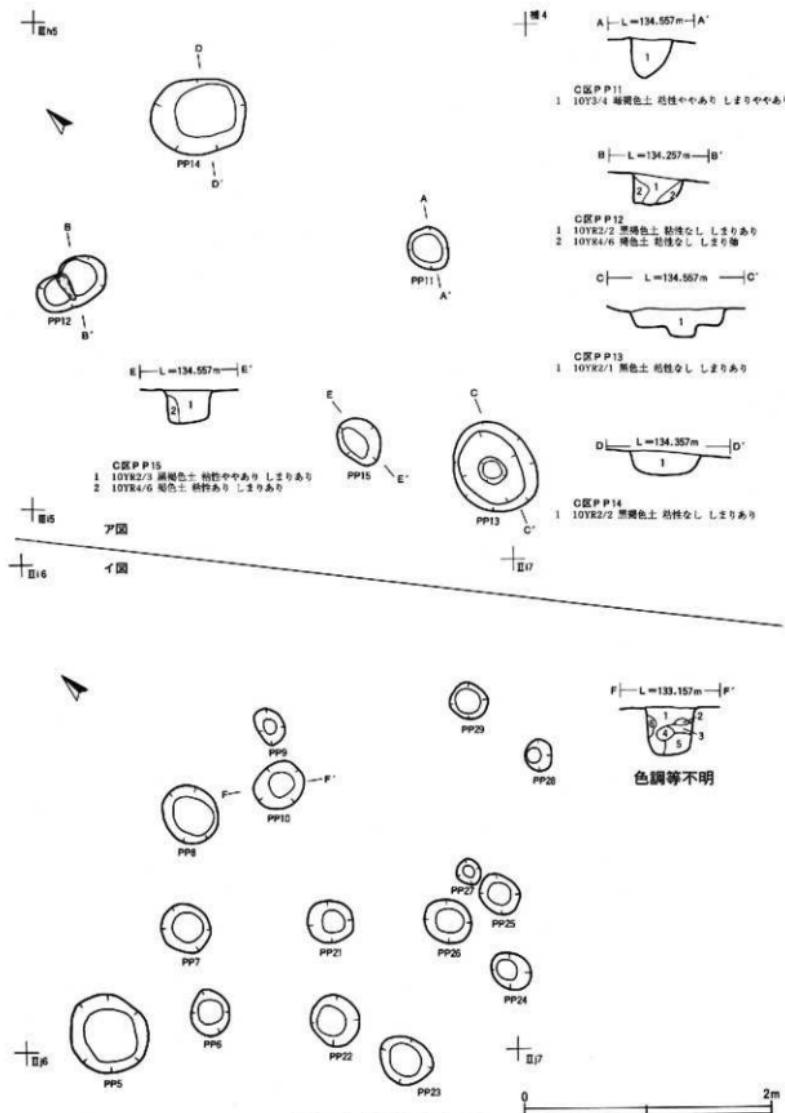
E区グリッドI i 9で検出。10号土坑を円形のプランで囲む柱穴列が存在し、堅穴住居跡の柱穴の可能性もある。しかし、埋土が比較的新しく、特定できない。

ク：P P 47・54~76・80・81・88・90・130・131

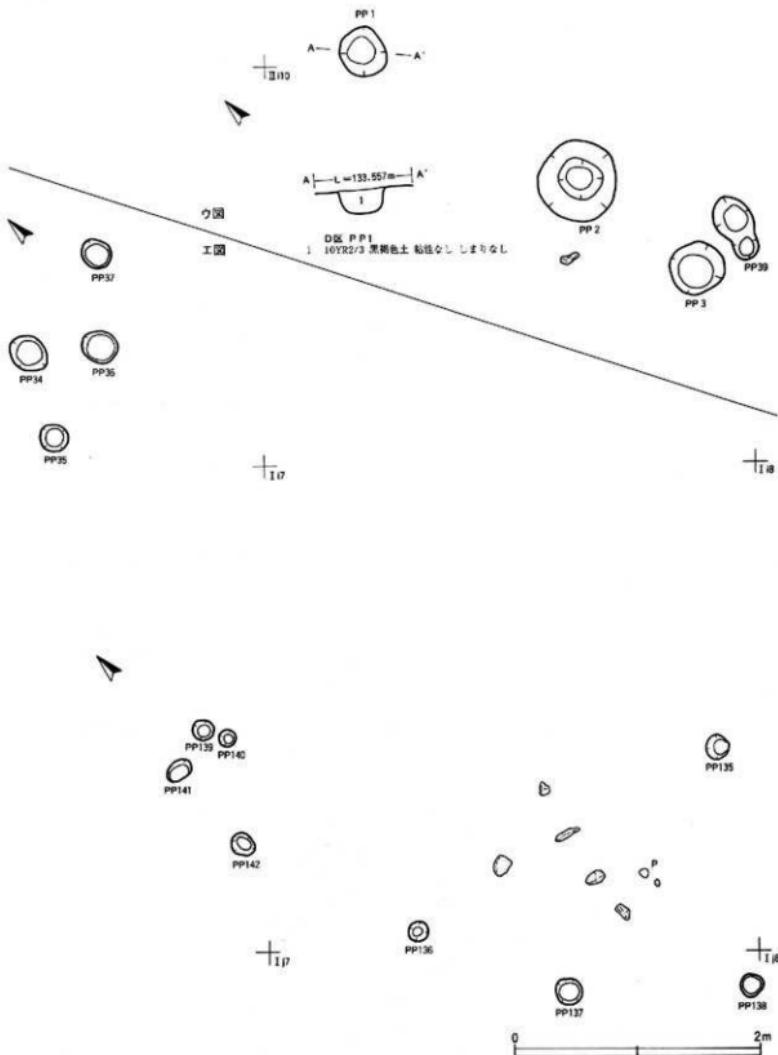
E区グリッドI i 9 j 8・9にかけて検出した。2号住居跡の東側に位置する。P P 63・102・67・69・91に掘立柱建物跡状の列を見い出せるがそれに対応する柱穴列が存在しない。仮にあったとしても埋土から縄文時代ではなく中世以降のものと推察する。



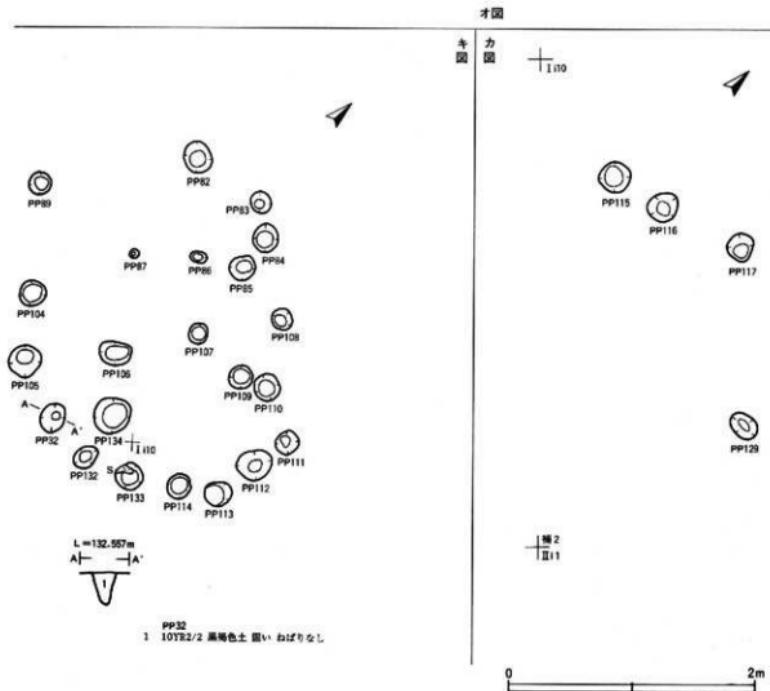
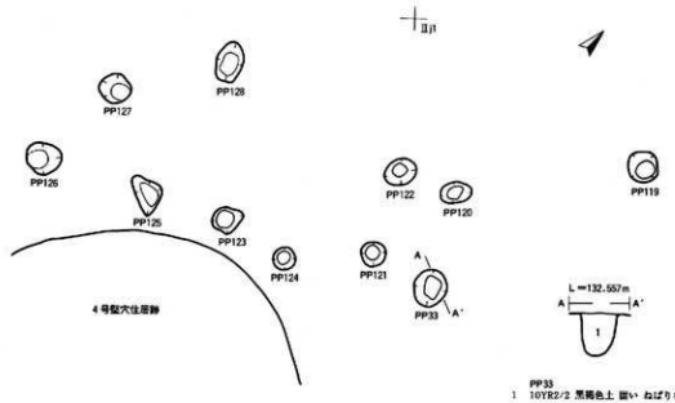
第14図 墓塚・集石土坑



第15図 柱穴①ア図・イ図

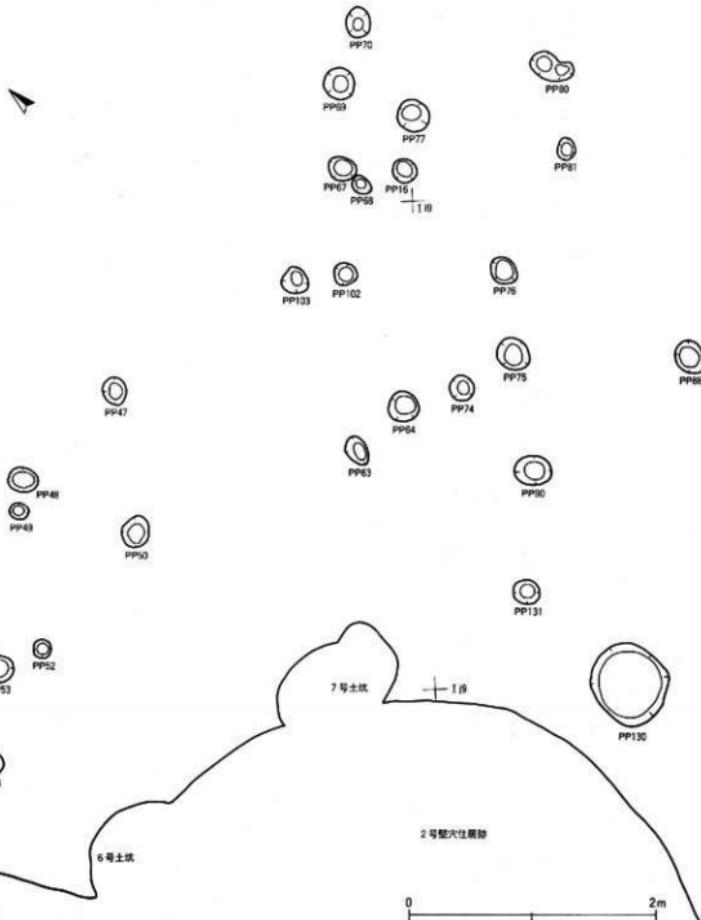


第16図 柱穴②ウ図・工図



第17図 柱穴③才図・力図・キ図

ク図



第18図 柱穴④ク図

柱穴観察表①

番号	検出地点	図版	口 径	下 径	深さcm	備 考
1	II i10	19・ウ	39.5	23.5	22.9	
2	II i10	19・ウ	64	21.4	26.9	
3	II i10	19・ウ	45	29	30.8	
4	I i7	18・イ	74.5	57.5	51.2	
5	II j6	18・イ	68.5	47	34.1	
6	II j6	18・イ	37	21.5	34.7	
7	II j6	18・イ	33	27	35.5	
8	II j6	18・イ	50	35.5	37.8	
9	II j6	18・イ	30	15	39.2	
10	II j6	18・イ	43.5	21	40.6	
11	III i5	18・T	33.5	24	30.2	
12	III i5	18・T	(40)	(27)	22.8	
13	III i5	18・T	76	16	25.6	
14	III h5	18・T	77	50	26.6	
15	III i5	18・T	41	28.5	26.2	
16	I i8	21・ク	19.5	14	8.5	
17						削除
18						削除
19						削除
20						削除
21	II j6	18・イ	38	20.5	36.6	
22	II j6	18・イ	42	25.5	40.7	
23	II j6	18・イ	45	28	22	
24	II j6	18・イ	33.6	19.5	39	
25	II j6	18・イ	36	20	30.4	
26	II j6	18・イ	40	24.5	31	
27	II j6	18・イ	22	12	52.6	
28	II j6	18・イ	25	14.5	23.6	
29	II j6	18・イ	31.5	21.5	12.5	
30	I i8	21・ク	24	13	14.1	
31	I i8	21・ク	26.5	20	27.3	
32	I i9	20・キ	49	18.5	27.5	
33	II j1	20・オ	32.5	21	34.8	
34	I i7	19・エ	32.5	21.5	29.4	
35	I i7	19・エ	23	15	16.2	
36	I i7	19・エ	30	22.5	9.2	
37	I i7	19・エ	26.5	19.5	6.2	
38						削除
39	I i8	21・ク	57	20.5	27.5	
40	I i8	21・ク	26.5	11	24.7	
41	I i8	21・ク	29	13.5	16.2	
42	I i8	21・ク	23.5	14	23.8	
43	I i8	21・ク	20	16.5	26.1	
44	I i8	21・ク	47	35	25.5	
45	I i8	21・ク	42	28	11.5	
46	I i8	21・ク		42.5	29	21.8
47	I j8	21・ク	24		13	27.5
48	I j8	21・ク	24.6		17.4	44
49	I j8	21・ク	16		9	25.2
50	I j8	21・ク	27.4		15.6	33.6
51						削除
52	I j8	21・ク	15.4		9	27.5
53	I j8	21・ク	24		15	15.9
54	I j8	21・ク	23.5		17	18.9
55						欠 番
56						欠 番
57						欠 番
58						欠 番
59						欠 番
60						欠 番
61						欠 番
62						欠 番
63	I i8	21・ク	24		15.6	28.8
64	I i8	21・ク	25.5		18	23
65						欠 番
66						欠 番
67	I i8	21・ク	24		15	34.9
68	I i8	21・ク	17		9	7
69	I i8	21・ク	25.5		14	22.9
70	I i8	21・ク	24.5		10.5	18.3
71	I i8	21・ク	24		12.5	28.8
72	I i8	21・ク	(22)		(12)	14.6
73	I i8	21・ク	22.4		12	22
74	I j9	21・ク	20.5		12	32
75	I j9	21・ク	28		18	28.1
76	I i9	21・ク	24		16.5	14.9
77	I i8	21・ク	28		16	17.1
78						削除
79						削除
80	I i9	21・ク	36		10	14.2
81	I i9	21・ク	18		10	12
82	I i8	20・キ	26		14	30.5
83	I i8	20・キ	19		8	40.7
84	I i8	20・キ	23.5		15	23.8
85	I i8	20・キ	21.3		18.5	27.2
86	I i8	20・キ	26		13.5	12.2
87	I i8	20・キ	15		7.5	6.7
88	I j9	21・ク	28		18.5	14.6
89	I i9	20・キ	18		12	12.3
90	I j9	21・ク	29		16	16.3

柱穴観察②

番号	検出地点	図版	口 径	下 径	深さcm	備 考
91	I k8		(19.5)	12	(122.9)	2号住P1
92	I k8		(23.5)	(16)	(22.4)	2号住P2
93	I k8		19.5	13.5	6.3	2号住P3
94	I k8		22.5	11	19	2号住P4
95	I k8		52	22.4	(13)	2号住P5
96	I j9		28	18	27.6	2号住P6
97	I j9		25	15.5	13.5	2号住P7
98	I j9		(44)	(36)	(22.5)	2号住P8
99	I k9		(40)	(25)	(11.2)	2号住P9
100	I k9		30	19	22.2	2号住P10
101	I k9		(43)	(31)	(25.1)	2号住P11
102	I i8	21・タ	19	12.5	13.6	
103	I i8	21・タ	22	12	12.7	
104	I i9	20・キ	21.5	17	17.8	
105	I i9	20・キ	26	14	33.5	
106	I i9	20・キ	27.5	19.5	26.5	
107	I i9	20・キ	18	12	28.1	
108	I i9	20・キ	18	11.3	21.4	
109	I i9	20・キ	20	14.5	22.8	
110	I i9	20・キ	22	14	25.2	
111	I i10	20・キ	20	10	29.2	
112	I i10	20・キ	29	11	23.4	
113	I i10	20・キ	23.4	17	30.4	
114	I i10	20・キ	21.2	14.5	32.3	
115	I i10	20・カ	24	16.5	24	
116	I i10	20・カ	26	15	32.8	

番号	検出地点	図版	口 径	下 径	深さcm	備 考
117	I i10	20・カ	24	14	32	
118						概 観
119	II j1	20・オ	27.5	17	12.2	
120	II j1	20・オ	25	14	25	
121	II j1	20・オ	21.5	6.5	40.4	
122	II j1	20・オ	27	7	28.3	
123	II j1	20・オ	26.5	15.5	25.5	
124	II j1	20・オ	20	10	22	
125	II j1	20・オ	35	23	20.4	
126	II j1	20・オ	27.5	17	37.3	
127	II j1	20・オ	28.5	16.5	27.5	
128	II j1	20・オ	35	19	39	
129	I i10	20・カ	25	12	24.4	
130	I j9	21・タ	66.5	55	10	
131	I j9	21・タ	22	11.5	23.8	
132	I i9	20・キ	20.5	11	27.9	
133	I i10	20・キ	22	14.5	33.5	
134	I i9	20・キ	31.4	22	22.4	
135	I j8	19・エ	19	12.5	23.7	
136	I j8	19・エ	16.5	7.5	19.1	
137	I j8	19・エ	21.5	17	25.8	
138	I j8	19・エ	19	15.5	18	
139	I j7	19・エ	18.5	12	50.4	
140	I j7	19・エ	15	8	15.5	
141	I j7	19・エ	22.5	16.5	8.2	
142	I j7	19・エ	21	14	17	

3 出土遺物

出土遺物は総数で、縄文土器大コンテナ2箱、石器30点あまり、土製品10点である。遺構内ではなるべくすべてを掲載しているが、除外された遺物もある。遺構外では土器は完形品と口縁部を中心に、石器は12点、土製品は実測・写真撮影の可能な5点を取り上げる。前述した通り1号竪穴建物跡、4号土坑、3号墓坑出土土器は擾乱と判断し遺構外で取り上げている。

(1) 縄文土器（遺構内第19～21図・写真図版12・13図・遺構外第22・23図・写真図版14）

縄文土器は後期初頭を中心にして出土している。口縁部を見る限りでは明確にそれ以外の時期に比定される土器は34の1点のみである。34は前期末葉の土器の口縁部で円筒下層d式に比定する。

ここでは後期初頭から前葉を含めて機種別に分類した。

A 深鉢形土器

出土土器の大半を占め深鉢と小型の深鉢がある。

a 単節の斜縄文を地文とし、「S」・「逆S」字や蛇行文を充填文とする三角形状の沈線文が施文される土器（遺構内1・2・3・4・17・19・20・22・23・30遺構外35～55）

ほぼ完形で出土した20の小型の深鉢はこの種類の代表的な例である。最大径は口縁部にあるが山形状の口縁部はややキャリバー状に内消する。そして、口唇部が円状にならざる。縄文の擦消しが中途で、すべてを擦消さない。一部に縄文を充填する箇所も見られる。22・23と36・37の破片は20と同じような山形口縁であるが口唇部は円状である。41は連続のS字が充填されるところが20と酷似する。三角形状の区画を描く沈線は3や38・39・47～49のように、内部を肉厚状に施す場合と4や30のように内部を擦消す場合の2通りがある。

19は20と同じように三角形状の区画であるがJ字文を大きく描く。このように大きな文様をもつものに35がある。35は山形口縁のJもしくは蛇行文をもつものと思われる。42・43や46も同じような施文となるのか。また、44・45のように円文をもつものもある。

50～55は上記の特徴をもつが擦消しがはっきりと施されているものである。50は大きなJもしくはS字文、51は渦巻文を、52～54は三角形状の区画内を、55はやや外反する口縁部を擦消しており、上記のように中途の擦消しとは異なる土器である。

b 口縁部が折り返し状に肥厚している土器（遺構内31・32遺構外56～61）

多くの土器にこのような特徴が見られるがここでは特にそれが顯著なものを取り上げた。確認できたもののすべてが口唇部が円状に施す。56・57は山形口縁で折り返し内に沈線を持ち、その下もしくは内部にボタン状の貼付け文を施す。31・60・61は折り返しに縄文を充填しその下に沈線によって区画し内部を擦消す。58は上記と同じであるが擦消さない。59は方形に区画している。

32は折り返しに円形の連続刺突文を施している口縁ものと思われる。

c 方形から長方形状の区画文が施文されている土器（遺構外62～65）

少量であるが遺構外で出土している。これらの土器は鉢形土器としているが壺形土器の可能性もある。

62・63は隆帯で、64・65は沈線で方形もしくは長方形状に区画し、62・64は区画内を擦消し？、65は縄文を充填している？。

d 粗製土器の口縁部（遺構内6～8・13～16・21・25・26・31・33遺構外66～74）

口縁部をやや肥厚し口唇部を円状にするもの（ア）と、肥厚せず口唇部を円状のままにするもの（イ）の2種類がある。

アには8・14・15・21・66～70がある。この種類は一般に21のような大柄な深鉢が多いようである。

イには6・7・13・16・18・26・71～74がある。口唇部をやや肥厚するのは6のみである。この種類は波状口縁を呈すであろう73を除いて、薄手のものが多くやや小型になろうか。74は口縁部に縄文压痕文を巡らすであろう。

e 脊部・底部資料（遺構内9～12・27・28遺構外75～77）

出土土器のほとんどが単節の斜縄文を地文としている。9・10がその例である。75・76は擦消しを帯状に平行に施す。1号炉で逆位に埋設されていた11の粗製土器は0段多条縄文を地文とする。

底部資料12・29は笠葉痕で29はそれを擦消し、25は沈線で痕を消すように直角に描く。28の浅鉢は上げ底風で、上記の75・76と同一個体であると思われる。

B 痕形土器

出土の割合は少ない。小型と思われる個体、破片がすべてで大型のものは出土していない。

a 三角形状の区画文が施される土器（遺構内24・遺構外42・78・79）

ほぼ完形で出土した78は上部が欠損しているが、切断蓋付土器である可能性が高い。無文で沈線により三角形状に区画し外に円文やS字文を施す。脣下部に最大径を持つと思われ、下部は磨かれている。24・79は78と同類の土器と思われ、24は渦巻文が施される。

c 方形から長方形状の区画文が施される土器（遺構内5・18遺構外80）

上部が切断もしくは欠損しているが、18の土器がこの種類の典型である。隆帯で方形もしくは長方形状に区画し、その区画内を曲線的に沈線で施文する。5の土器も同種類のものである可能性が高い。80は肥厚させた口縁部を持ちその下に沈線で方形の区画を施す。痕形土器と思われるが浅鉢の可能性も考えられる。

以上のうちA・Bのcはいずれも十腰内I式に比定され、Aa・bとBaは十腰内II式に先行する土器群であろうと思われる。

また、Aa・bに分類された中の50～57の一部に十腰内II式に相当する可能性のある土器（56？）を含む。

(2) 土製品（第23図 写真図判15）

小型でづくね土器5体のうち、1は口縁部を肥厚させ、底部に張り出しをもち上げ底風である。2は小型の鉢と思われたが、脣部の下部に最大径を持ち上部がやや狭まることから土製品とした。擦消痕がある。

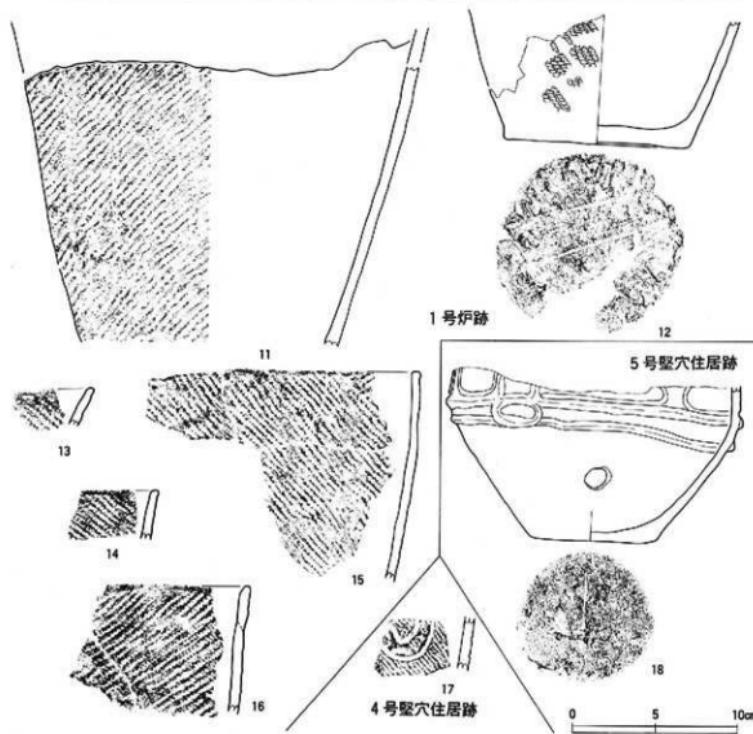
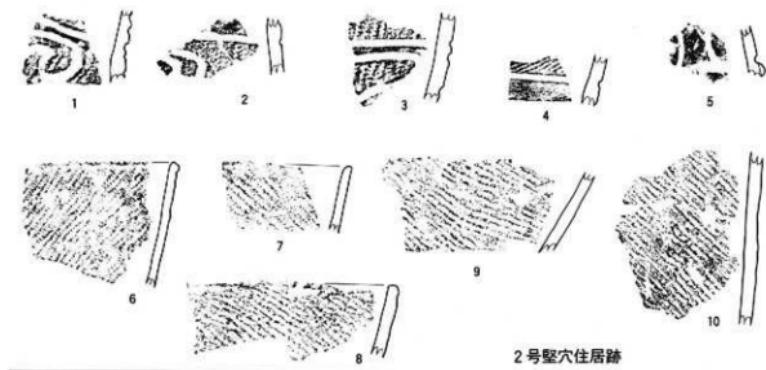
3は鉢形、4は浅鉢形もしくは皿形で、5は不明。

(3) 石器・石製品（第23図 写真図判15）

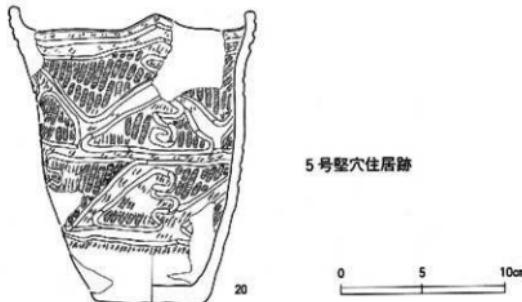
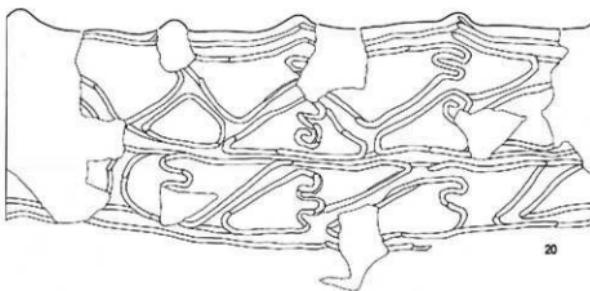
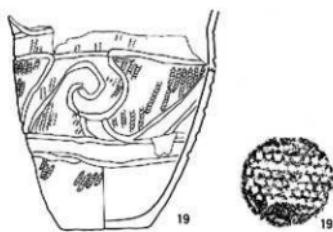
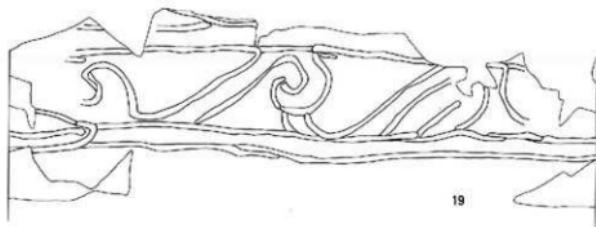
石鎌が2点、石匙が1点出土した。石鎌7は有茎で前面に剥離調整を施し、8は無茎で側刃部と抉入部の調整のみである。石匙9は平面形が直刃、断面形が凸で使用痕は不明である。

その他では搔削器が10点出土した。そのうち搔器は1・10でほかは削器である。

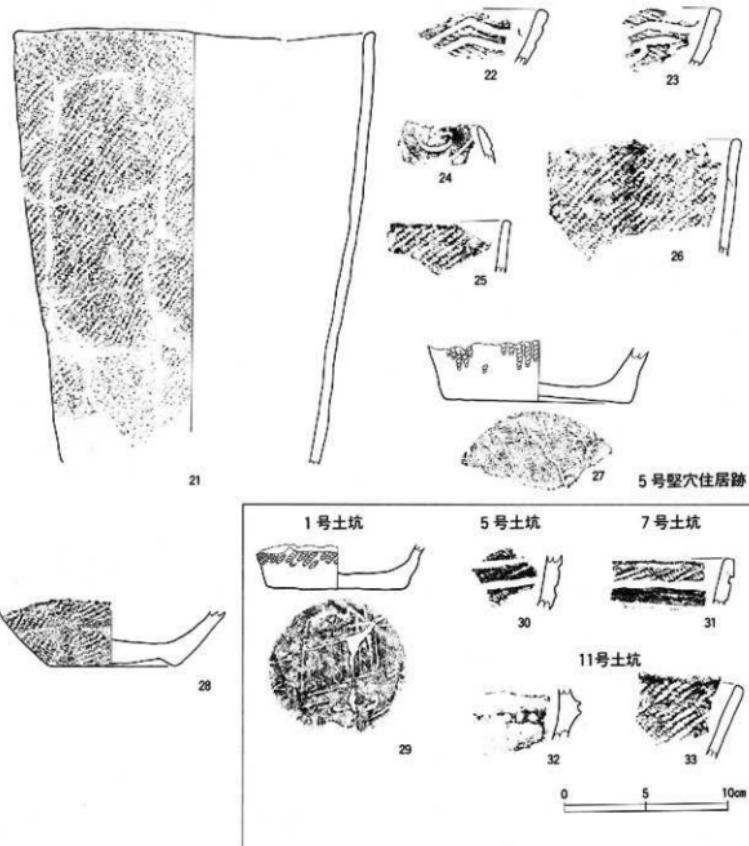
石製品では、擾乱土から岩球（15）が出土している。



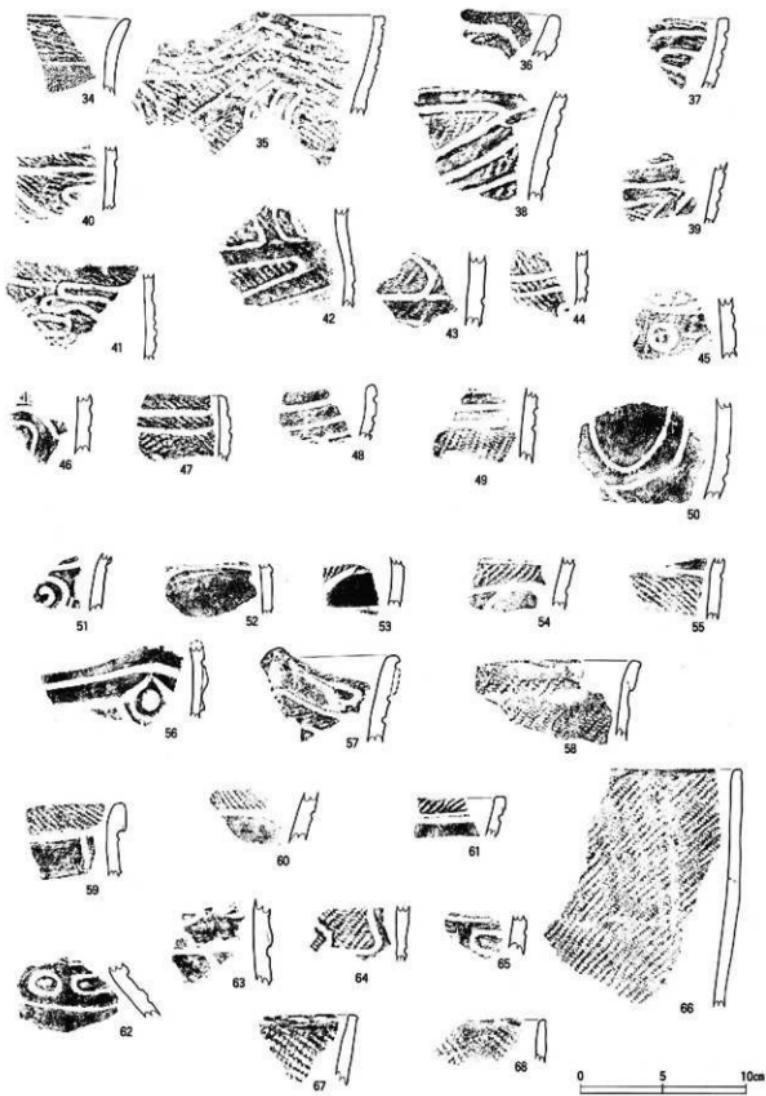
第19図 出土遺物(1) 造構内出土器①



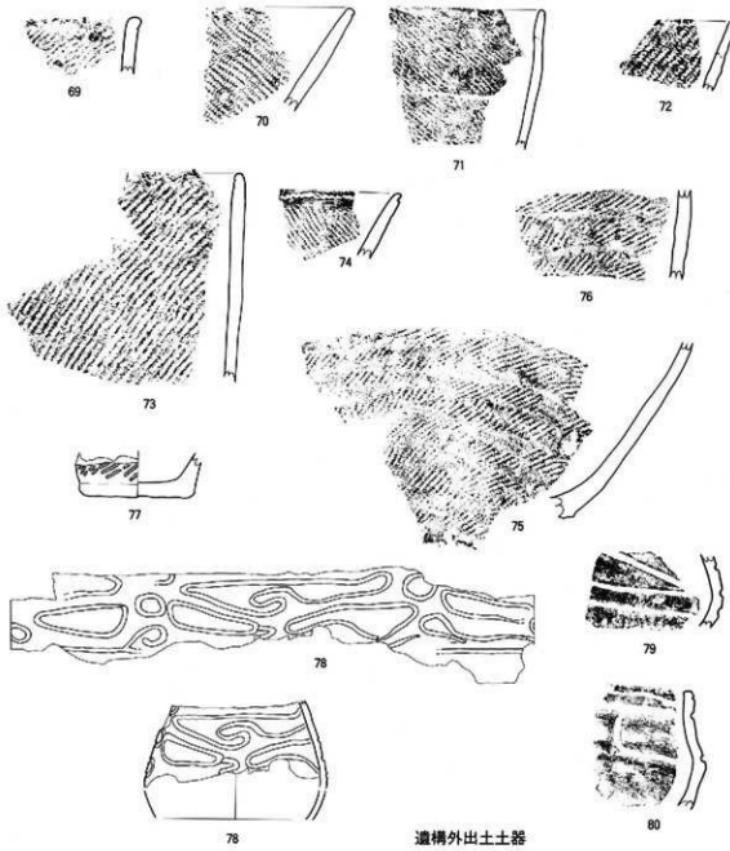
第20図 出土遺物(2) 造構内出土土器②



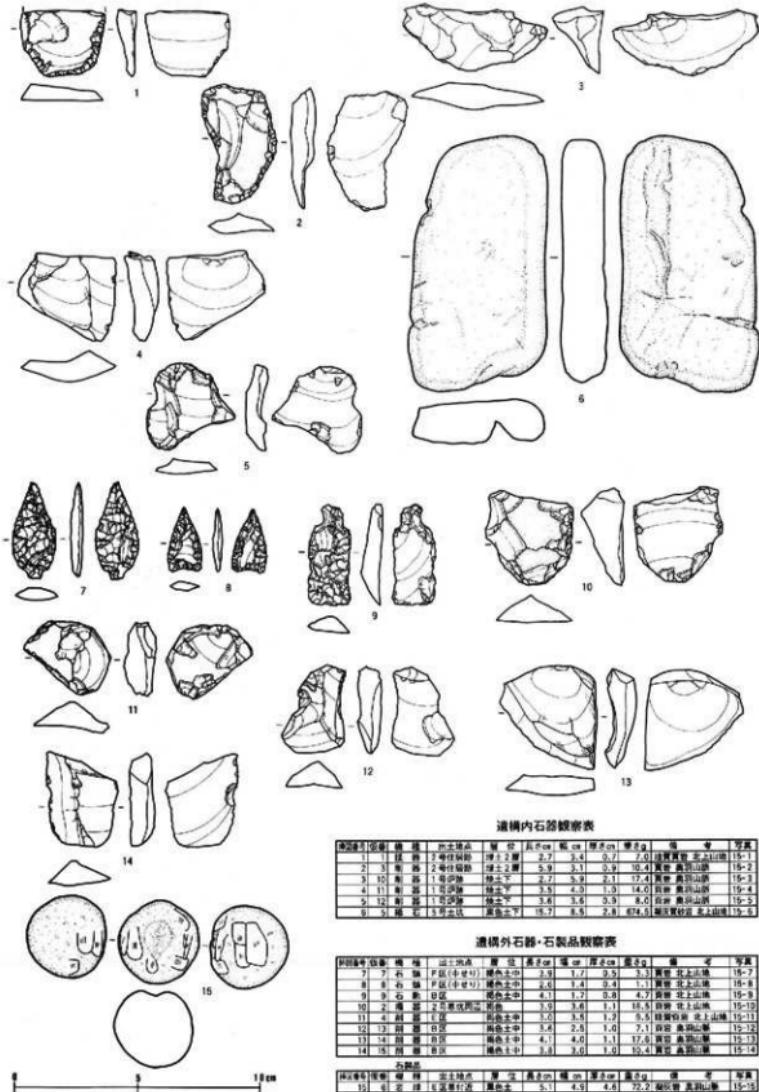
第21図 出土遺物(3) 遺構内出土土器③



第22図 出土遺物(4) 造構外出土土器①



第23図 出土遺物(5) 遺構外出土土器(2) 土製品



第24図 出土遺物(6) 石器・石製品

遺構内石器・石製品観察表

遺構名	位置	地質構造	厚さ	長さ	幅	高さ	重さ	品種	寸法
1-1	柱	2号砂岩層	2.7	3.4	0.7	7.0	0.7	打削器	北上山脈 15-1
2-3	柱	2号砂岩層	5.9	3.1	0.9	10.4	0.5	打削器	北上山脈 15-2
3-11	柱	1号砂岩層	3.6	3.7	0.7	7.0	0.5	打削器	北上山脈 15-3
5-12	柱	1号砂岩層	3.6	3.6	0.9	8.0	0.5	打削器	北上山脈 15-2
6-3	柱	5号砂岩層	5.7	8.5	2.8	0.5	0.5	打削器	北上山脈 15-5

遺構内石器・石製品観察表

遺構名	位置	地質構造	厚さ	長さ	幅	高さ	重さ	品種	寸法
7-7	柱	2号砂岩層	3.3	1.7	0.3	7.0	0.5	打削器	北上山脈 16-7
8-8	柱	F区(小字7)	3.0	1.4	0.4	7.0	0.5	打削器	北上山脈 16-8
9-9	柱	1区	4.1	1.7	0.8	4.7	0.5	打削器	北上山脈 16-9
10-2	柱	2号砂岩層	3.0	3.6	1.1	8.0	0.5	打削器	北上山脈 16-10
11-11	柱	1号砂岩層	3.0	3.6	1.1	8.0	0.5	打削器	北上山脈 16-11
12-12	柱	1号砂岩層	5.6	2.6	1.0	7.0	0.5	打削器	北上山脈 16-12
13-14	柱	1号砂岩層	4.1	4.0	1.1	17.0	0.5	打削器	北上山脈 16-13
14-15	柱	1号砂岩層	3.0	3.0	1.0	10.0	0.5	打削器	北上山脈 16-14

遺構名	位置	地質構造	厚さ	長さ	幅	高さ	重さ	品種	寸法
15-15	柱	E区(小字15)	5.1	4.9	0.8	22.0	0.5	打削器	北上山脈 16-15

遺構内土器観察表

標団 番号	仮番	出土地点	層位	器種	部位	銘 案	分類	写真
1	40	2号住居跡	埋土下位	深鉢	口縁	沈縁、J字文様	A-a	12-1
2	19	2号住居跡	埋土1層	深鉢	口縁	沈縁(平行) S字充填文様? 区画内擦消し	A-a	12-2
3	41	2号住居跡	埋土2層	深鉢	胴部	平行沈線、三角形状沈線区画	A-a	12-3
4	20	2号住居跡	埋土1層	深鉢	口縁	沈縁(平行) 三角形状沈線区画、区画内擦消し	A-a	12-4
5	22	2号住居跡	埋土上位	深鉢	胴部	1と同一個体か? 沈縁、貼付隆帯、朱塗り	B-b	12-5
6	16	2号住居跡	埋土1層	深鉢	口縁	折り返し状平行線、LR	A-d	12-6
7	18	2号住居跡	埋土1層	深鉢	口縁	折り返し状平行線、RL	A-d	12-7
8	21	2号住居跡	埋土1層	深鉢	口縁	折り返し状平行線、RLとR	A-d	12-8
9	14	2号住居跡	埋土1層	深鉢	胴部	13と同一個体か? RL	A-e	12-9
10	15	2号住居跡	埋土1層	深鉢	胴部	13と同一個体か? RL	A-e	12-10
11	5	1号炉跡	埋設土器	深鉢	胴部	逆さに埋没、LO多条、一部反転	A-e	12-11
12	6	1号炉跡	焼土内	深鉢	底部	笠葉痕、LR発回転、一部反転	A-e	12-12
13	46	1号炉跡	褐色土中	深鉢	口縁	口縁擦消し、RL	A-d	12-13
14	47	1号炉跡	褐色土中	深鉢	口縁	口縁擦消し、RL	A-d	12-14
15	23	1号炉跡	焼土上位	深鉢	口縁	折り返し平行線、RL、21と同一個体か?	A-d	12-15
16	24	1号炉跡	床面	深鉢	口縁	折り返し平行線、LR	A-d	12-16
17	25	4号住居跡	埋土1層	深鉢	胴部	沈縁、J字充填文様(何まさ?)	A-a	12-17
18	1	5号住居跡	埋設土器	壺	底部~胴部	隙帶による方形状区画、切断?	B-b	12-18
19	2	5号住居跡	床面	深鉢	底部~胴部	沈線、J字文様	A-a	13-19
20	9	5号住居跡	褐色土	深鉢	完全	沈線、三角形状区画、S字連続文様	A-a	13-20
21	8	5号住居跡	埋土下位	深鉢	胴部(口縁)	口縁部LR、胴部RLと縦回転	A-d	13-21
22	28	5号住居跡	床面	深鉢	口縁	山形口縁、沈縁、三角形状区画、9と同じ文様	A-a	13-22
23	29	5号住居跡	床面	深鉢	口縁	山形口縁、沈縁、三角形状区画、28と同一個体	A-a	13-23
24	30	5号住居跡	床面	深鉢	胴部	沈縁、J字模文(S字)? うず巻?	B-a	13-24
25	31	5号住居跡	埋土下位	深鉢	口縁	折り返し状平行線、LR	A-d	13-25
26	26	5号住居跡	床面	深鉢	口縁	平行線、LR	A-d	13-26
27	3	5号住居跡	埋土1層	深鉢	底部	底部、笠葉痕、擦消し、RL	A-e	13-27
28	4	5号住居跡	埋土1層	深鉢	底部	ややあげ底風、LR	A-e	13-28
29	7	1号土坑	埋土下位	深鉢	底部	笠葉痕	A-d	13-29
30	36	5号土坑	壁際	深鉢	口縁	平行沈縁、擦消し	A-a	13-30
31	37	7号土坑	埋土	深鉢	口縁	折り返し状平行線、中に(上部)押し込むような沈縁	A-c	13-31
32	38	11号土坑	埋土	深鉢	口縁	円形連続刺突文(隣壁上に)	A-c	13-32
33	39	11号土坑	埋土	深鉢	口縁		A-d	13-33

遺構外土製品観察表

標団 番号	仮番	出土地点	層位	器種	備 考	写真
1	11	E区(A I j7-8)	褐色土	土製品		15-1
2	12	1号建物状遺構	黒褐色土下位	土製品		15-2
3	103	E区	褐色土	土製品		15-3
4	104	E区(I j6)	褐色土	土製品		15-4
5	106	C区(B i8)	黑色土中	土製品		15-5

遺構外土器観察表

検査番号	伝番	出土地点	層位	器種	部位	観 察	分類	写 真
34	55	D区	褐色土	深鉢	口縁	円形網突文(竹管による)押圧文、円筒系?		14-34
35	13	1号建物状遺構	黒褐色土	深鉢	口縁	波状、山形口縁、沈線による三角形状区画?	A-a	14-35
36	54	C区(II4-5)	褐色土	深鉢	口縁	山形口縁、沈線	A-a	14-36
37	59	E区(II1)	黒色土	深鉢	口縁	山形口縁(波状)折り返し?	A-a	14-37
38	73	1号建物状遺構	埋土2層	深鉢	口縁-胴部	沈線(大きめ力強い)三角形状区画	A-a	14-38
39	89	E区(Ij8)	褐色土	浅鉢	口縁	平行沈線、三角形状区画、区画内充填	A-a	14-39
40	100	不明	不明	浅鉢	口縁-胴部	三角形状区画、円-渦巻き文	A-a	14-40
41	32	3号墓塚	埋土	深鉢	胴部	沈線、連續S字状充填文様(9と同じ器種)	A-a	14-41
42	91	E区(IIj1)	黒色土	深鉢	口縁-胴部	三角形状、沈線	A-a	14-42
43	77	3号墓塚	埋土中	浅鉢	口縁-胴部	沈線、渦巻きもしくはS字、区画内充填LR	A-a	14-43
44	70	1号建物状遺構	埋土2層	深鉢	口縁-胴部	沈線、渦巻きもしくはS字状	A-a	14-44
45	93	E区	黒色土	浅鉢	口縁-胴部	円文、沈線	A-a	14-45
46	67	1号建物状遺構	埋土2層	深鉢	口縁-胴部	沈線、渦巻きもしくはS字状	A-a	14-46
47	49	3号墓塚	埋土黒色土下位	深鉢	口縁	沈線、三角形状区画	A-a	14-47
48	58	D区	褐色土	深鉢	口縁	平行沈線(3本)折り返し状口縁?	A-a	14-48
49	85	D区	褐色土	浅鉢	口縁	沈線、区画内擦消し	A-a	14-49
50	101	D区(II10)	黒色土下	浅鉢	口縁-胴部	」もしくは渦巻き文	A-a	14-50
51	82	C区(II4-5)	褐色土	浅鉢	胴部-底部	沈線、渦巻き状	A-a	14-51
52	34	3号墓塚	埋土1層	深鉢	口縁	沈線、区画内擦消し	A-a	14-52
53	79	3号墓塚	埋土中	浅鉢	口縁-胴部	沈線、三角形状区画	A-a	14-53
54	74	E区(Ij6)	褐色土中	深鉢	口縁	沈線、区画内擦消し、三角形区画	A-a	14-54
55	88	D区	褐色土	浅鉢	口縁	横位に擦消したのち沈線	A-a	14-55
56	60	E区	黒色土	深鉢	口縁	山形口縁(波状)折り返し円文、渦巻き状沈線	A-c	14-56
57	65	E区擾乱(II2)	黒色土	深鉢	口縁-胴部	折り返し状口縁、沈線、ループ文?	A-c	14-57
58	50	3号墓塚	埋土黒色土下位	深鉢	口縁	折り返し状平行線(一重)	A-c	14-58
59	57	E区(II1)	黒色土	深鉢	口縁	折り返し状平行線、四角形状沈線区画	A-c	14-59
60	92	E区	黒色土	浅鉢	口縁	折り込み状帶状に純文充填	A-c	14-60
61	43	1号建物状遺構	埋土2層	深鉢	口縁	折り返し状平行線、純文充填LR、平行沈線	A-c	14-61
62	35	E区	埋土中	深鉢	胴部	貼付隆脊、区画内圓形状区画(1と同じ器種)	A-b	14-62
63	97	E区	褐色土	浅鉢	胴部	隆脊、沈線、四角形状区画	A-b	14-63
64	84	C区(II4-5)	褐色土	浅鉢	胴部	沈線、四角形状区画、区画内LR	A-b	14-64
65	71	1号建物状遺構	埋土2層	深鉢	口縁-胴部	35と同一器種	A-b	14-65
66	53	C区(II4-5)	褐色土	深鉢	口縁	折り返し状平行線	A-d	14-66
67	51	E区(Ij7)	褐色土	深鉢	口縁	折り返し状平行線	A-d	14-67
68	48	1号建物状遺構	褐色土中	深鉢	口縁	口縁擦消し、RL	A-d	14-68
69	63	E区擾乱(II2)	不明	深鉢	口縁-胴部		A-d	14-69
70	33	3号墓塚	埋土	深鉢	口縁	折り返し状平行線、RL	A-d	14-70
71	64	E区擾乱(II2)	不明	深鉢	口縁-胴部	折り返し平行	A-d	14-71
72	44	1号建物状遺構	埋土2層	深鉢	口縁	折り返し状平行線、純文充填LR、平行沈線	A-d	14-72
73	76	3号墓塚	埋土中	浅鉢	口縁-胴部	波状口縁? 0段多条L	A-d	14-73
74	42	1号建物状遺構	埋土下位	深鉢	口縁	平行線、上部擦消し(横)帶状に	A-d	14-74
75	88	D区	褐色土	浅鉢	胴部	擦消しによる平行模様	A-e	14-75
76	83	C区(II4-5)	褐色土	浅鉢	胴部	擦消しによる平行模様	A-e	14-76
77	105	E区(Ij10)	褐色土	深鉢	底部		A-e	14-77
78	10	E区(AIj7-8)	褐色土	蓋	胴部	三角形状区画、沈線、切斷蓋付?	B-a	14-78
79	75	E区(Ij6)	褐色土中	浅鉢	胴部	沈線、区画内擦消し、三角形状区画	B-a	14-79
80	61	C区	黒色土	浅鉢?	口縁	折り返し、四角形状区画	B-b	14-80

V まとめ

1 遺構

今回の発掘調査の成果として、調査区が遺跡の西隅にあるにもかかわらず3棟の住居跡と1基の炉跡が検出されたことが上げられる。また、それは縄文時代後期初頭から前葉の時期に限られる。いずれも擾乱等で完全な形での検出とはならなかったが、比較的平面形や規模が推測できるものに2号竪穴住居跡がある。その規模は長軸で5mである。石窯炉の検出状況からその平面形はだ円形と推測した。出土土器からほぼ同時期と思われるほかの2棟は平面形・規模を推測するには資料が足りないが、5号住居跡は炉の位置などからやや小規模の円形状、4号は2号住居跡と同規模と考える。時期は、もっとも信頼のおける5号住居床面から出土した土器から初頭から前葉のうちやや前葉期に近いものである。

一方、2号住居跡の東側で検出された1号炉跡は、複式炉であった可能性が高い。その炉をもつ住居跡（いわゆる3号竪穴住居跡）は検出できなかったが、炉跡を中心に巡るような小さな柱穴がある。それを壁柱穴と推定すればそれは複式炉をもつた大型の住居跡で、縄文時代後期初頭のものであろう。

土坑はD区から3基、E区から4基検出されているが、ここではE区検出の土坑について述べる。

5号土坑は大型の土坑で5号住居跡の床面と思われる面で検出した。6・7号土坑は小型であるが2号住居跡を切り、その埋土は壁として残っている。その時期は、出土遺物を見てみると2つの住居跡とほぼ同時期であると言えるが、重複関係から2つの住居跡より古いものであろう。

このことから調査区E区に限って縄文時代の居住空間をまとめれば、後期の竪穴住居跡は後期の前葉近くに、それ以前の住居跡や土坑を切る形で、白鳥川東側段丘面の西隅に片寄る傾向にあるといえる。

もう1つ上記土坑と異なる性格を持つものが11号土坑いわゆる配石土坑である。同じような類例を下村B遺跡に見ることができる。時期は不明としているが、土坑内部に後期初頭の壺形土器が出土した配石土坑がある。11号土坑ではその出土がなかったが周辺に出土しており関連性も考えられる。

次に竪穴建物状遺構であるが、埋土に中世の遺物は存在しないが、柱穴が建物状に配置され、竪穴の南壁がだらかに立ち上がる。また出入り口を設置したと思われる柱穴も検出できたことから中世の遺構であろうと推測している。この遺構のように壁上部に柱穴を持つ中世の遺構の存在を知らない。よって詳細は述べず、新たなる発掘の類例を待ちたいと思う。

最後に100基以上検出された柱穴もしくは柱穴状ピットは、縄文時代とその他の時代に分類しようと試みたが、小規模で覆土も同じ土色のために断念した。前述したが円形に規則的に廻るものは縄文時代の可能性もあり、また1列に並ぶものは掘立柱建物跡であろうか。しかし、どちらも不完全なところがあり可能性としか言えず、残念である。

2 遺物

遺物は縄文土器を中心とする総数で大コンテナ2箱の出土である。その8割強がE区に集中する。その出土層位は黒褐色土から褐色土に限られるが、擾乱から出土したものもある。ここでは、縄文土器について若干の補足をしたい。

縄文土器はE区の一部に集中し、特に5号竪穴住居跡付近がもっとも出土量が多い。この区域で出土する土器は復元できるものもあり、破片も地文や沈線等がはっきりと残る。そのほとんどが縄文時代後期前葉の土器である。

ここで、同時期の土器が多く出土している二戸市の馬立I遺跡を指標にして、当遺跡出土土器を見てみる。

IV 3 出土遺物 で分類したAaの19・20小型深鉢とBcの18壺形土器はこの遺跡の代表的な出土例であるがこの2つの土器は5号竪穴住居跡で出土している。同じような土器を出土させる馬立I遺跡の住居跡としてはG II f 2-1住居跡があげられる。このなかで、19・20と同様の土器を十腰内I式に先行する土器、18と同様の土器を十腰内I式と分類し、G II f 2-1住居跡に共判する形で出土していることから、「19・20同様の土器群（1・2類）は18同様の土器群（3類）にやや先行するか、あるいは文様変遷の過渡期に当たり、一部共判する時期があるものなのか、いずれにせよ3類の土器群とあまり時期差のない土器群と思われる」（1988 田鎖ほか）としている。

当遺跡での5号住居跡の土器出土状況は、馬立I遺跡G II f 2-1住居跡に比べ質量ともに見劣りするが、復元できた3個体はあまり時期差のない土器群とする田鎖ほかの考えに従いたい。よってそれに付随する土器を出す遺構の時期を縄文時代後期初頭から前葉としている。

そのなかで、18の壺形土器はよく磨かれた胴下部に直径2cmほどの不整な円形の孔をもつ。外部から穿かれた様子で、内部にはがれた痕がある。また、赤色顔料を塗付されており、欠損している断面は平らで削り等の調整を施しているよううかかがえる。いわゆる切断蓋付土器か。

切断蓋付土器が住居内で検出された例はあまりないが青森市の丸山遺跡に見出すことができる。長軸約6m 60cmの大型の住居跡のはば中央部の床面から胴部最大径10cm足らずの壺が出土している。

また、1998年に岩手文化振興事業団で発掘調査した同二戸市の大向上平遺跡で後期初頭の切断蓋付と思われる埋設の壺形土器が検出されたが、この中からヒスイ製の大殊2点や玉70点などが出土している。胎児や幼児骨を埋葬したものと推測されているが、当出土土器も同じような意味合いをもつものではなかろうか。

とすれば、土器にあけられている孔は祭祀的な意味合いをもつものであろうか。今後の類似壺形土器の出土が待たれる。

参考・引用（Ⅱ・遺跡の立地と環境）

- ・上里遺跡発掘調査報告書 高橋與右衛門（1963）
岩垣文第5・5集（財）岩垣文
- ・田代遺跡発掘調査報告書 浜井宗治ほか（1997）
岩垣文第253集（財）岩垣文
- ・第四紀研究第1巻第4号 日本第四紀学会編（1963） 有明書院
- ・二戸市遺跡詳細分布調査報告書(2)（1984） 二戸市教育委員会

参考・引用（Ⅳ・検出遺構と出土遺物 V・まとめ）

- ・沖附(1)遺跡 発掘調査報告書 成田誠治ほか（1986）
青森県教育委員会
- ・沖附(2)遺跡 発掘調査報告書 北林八満晴ほか（1986）
青森県教育委員会
- ・弥栄平(1)遺跡発掘調査報告書 三浦圭介ほか（1986）
青森県教育委員会
- ・弥栄平(2)遺跡発掘調査報告書 成田誠治ほか（1984）
青森県教育委員会
- ・弥栄平(4)(5)遺跡発掘調査報告書 北林八満晴ほか（1986）
青森県教育委員会
- ・弥栄平(6)(7)(8)遺跡発掘調査報告書 工藤大ほか（1991）
青森県教育委員会
- ・青森市三内遺跡 発掘調査報告書 桜田隆ほか（1978）
青森県教育委員会
- ・二戸市遺跡詳細分布調査報告書(2)（1984） 二戸市教育委員会
- ・国説日本の土壤 山根一郎ほか（1978）
朝倉書店

- ・岩手県の地名 日本書紀地名大系3
平凡社
- ・上尾田の旅跡発掘調査報告書 工藤徹（1999）
岩垣文第300集（財）岩垣文
- ・馬立I・太田遺跡発掘調査報告書 田鎖壽夫ほか（1988）
岩垣文第123集（財）岩垣文
- ・一戸城跡 一戸町文化財調査報告書第12集（1985）
一戸町教育委員会
- ・馬立I・太田遺跡発掘調査報告書 田鎖壽夫ほか（1988）
岩垣文第123集（財）岩垣文
- ・乱久保I・II・III・IV遺跡発掘調査報告書 佐々木直喜ほか（1987）
岩垣文第116集（財）岩垣文
- ・田代遺跡発掘調査報告書 浜井宗治ほか（1997）
岩垣文第253集（財）岩垣文
- ・上里遺跡発掘調査報告書 高橋與右衛門（1983）
岩垣文第55集（財）岩垣文
- ・上村・下村A・B遺跡発掘調査報告書 四井謙吉ほか（1983）
岩垣文第56集（財）岩垣文
- ・江刺家IV遺跡発掘調査報告書 浜田宏（1996）
岩垣文第277集（財）岩垣文
- ・上尾田の旅跡発掘調査報告書 工藤徹（1999）
岩垣文第300集（財）岩垣文
- ・一戸城跡 一戸町文化財調査報告書第12集（1985）
一戸町教育委員会

写 真 図 版





真上から



西から

写真図版1　遺跡遠景(空中写真)



B区 調査前風景



D区 調査前風景



B区北側調査後風景



C区北側実掘

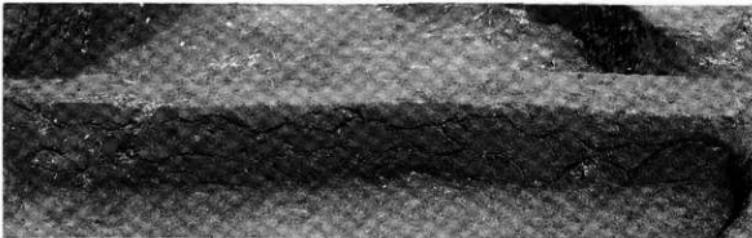


基本層序

写真図版2 調査前風景・基本層序



平 面



埋土断面

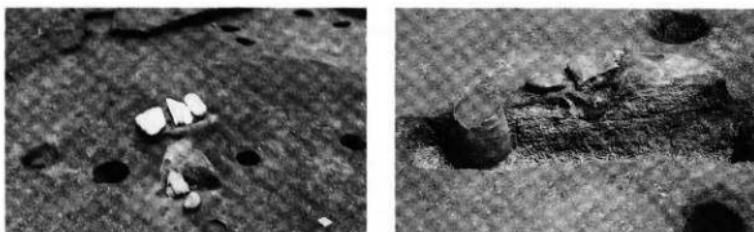


炉跡断面 S→



E→

写真図版 3 2号堅穴住居跡

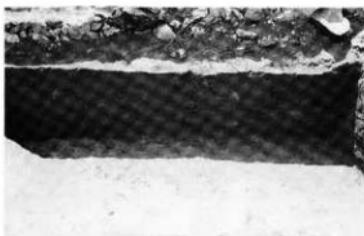


1号炉跡 平面

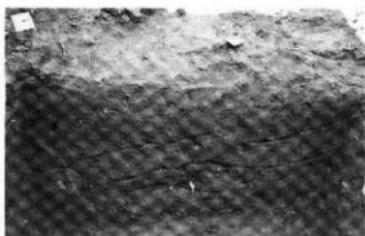
断面



4号堅穴住居跡 平面



埋土断面 N→



W→

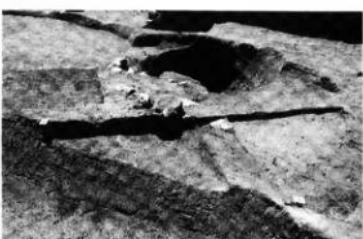
写真図版4 1号炉跡（3号堅穴住居跡）・4号堅穴住居



平面



埋土断面 N→



W→



炉跡 断面



遺物出土状況

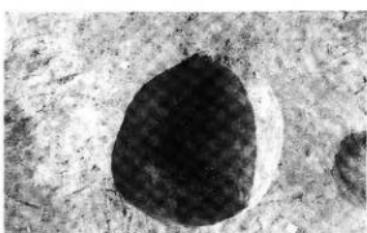
写真図版5 5号窓穴住居跡



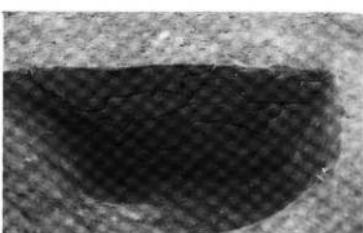
1号土坑 平面



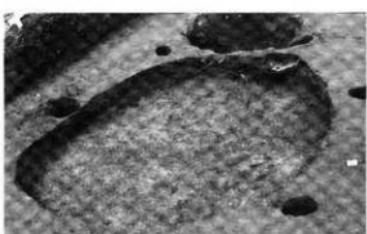
断 面



2号土坑 平面



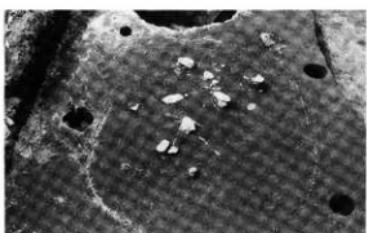
断 面



5号土坑 平面



断 面

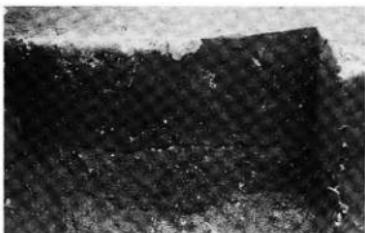


5号土坑 检出状况



遗物出土状况

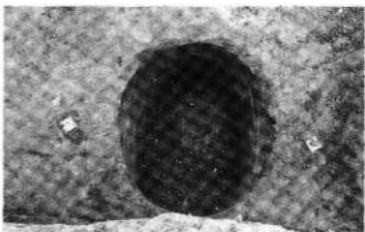
写真図版 6 1・2・5号土坑



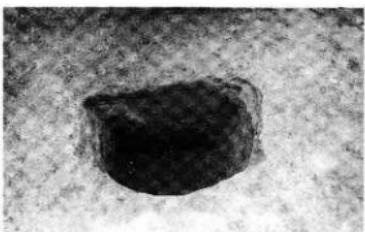
6号土坑 断面



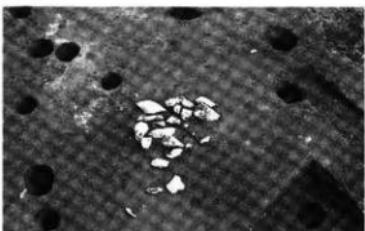
7号土坑 断面



10号土坑 平面



断 面

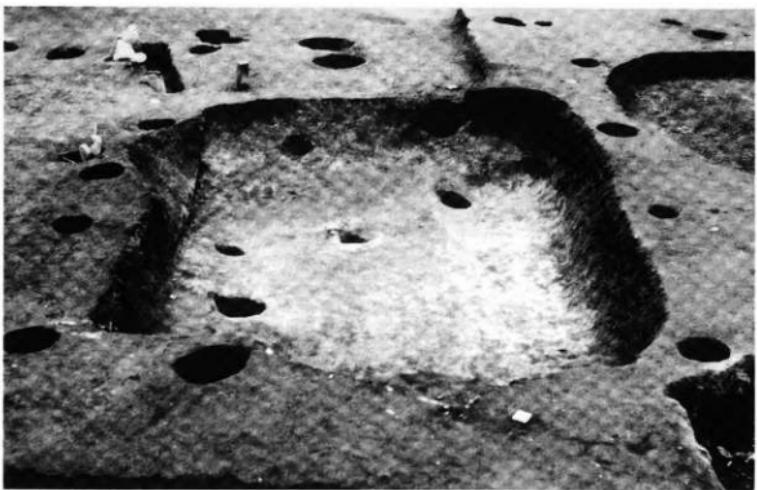


11号土坑 检出状况

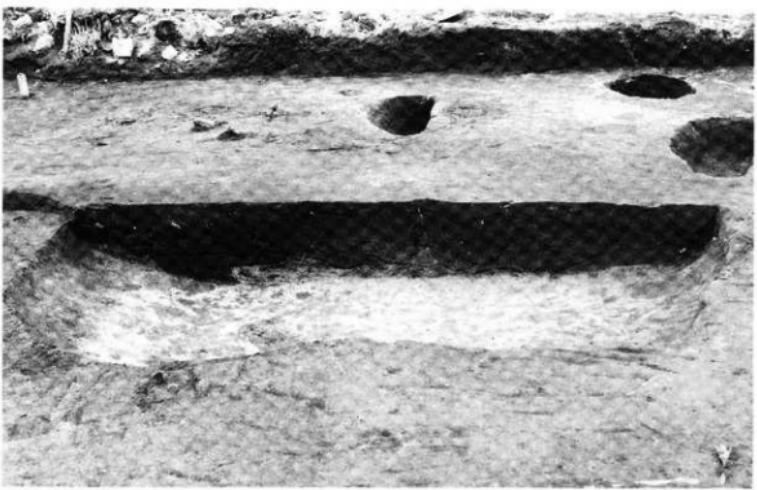


断 面

写真図版 7 6・7・10・11号土坑

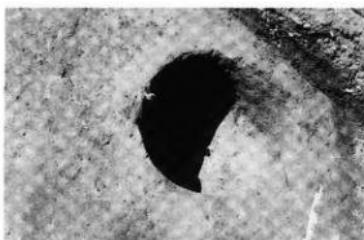


平面 N→

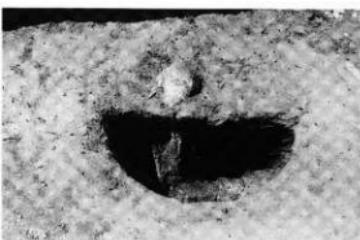


断面 E→

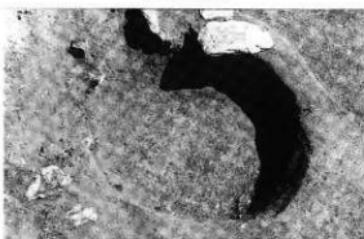
写真図版 8 1号堅穴建物状遺構



1号墓塘 完掘



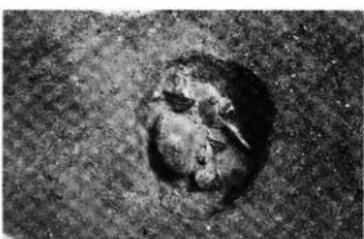
断 面



2号墓塘 完掘



人骨出土状况



1号集石小土坑 平面



断 面

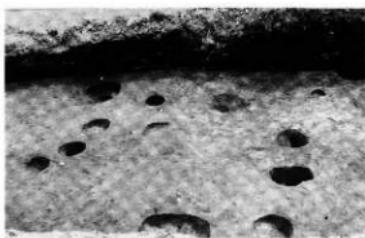


2号集石小土坑

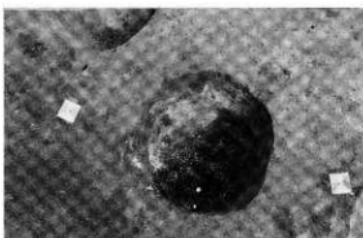


断 面

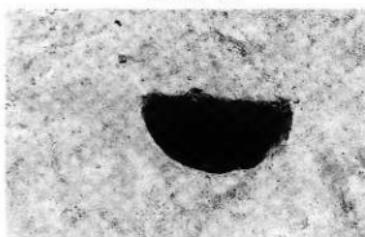
写真図版 9 墓塘 集石小土坑



C区柱穴群 平面



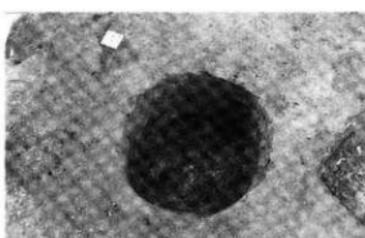
PP15 平面



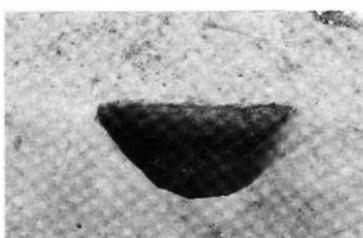
PP11 断面



PP12 断面



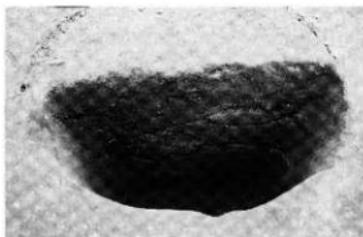
D区 PP1 平面



PP1 断面



D区柱穴群 平面



PP10 断面

写真図版10 柱穴①



E区柱穴群（11号土坑周辺）



E区柱穴群（4号住居跡周辺）



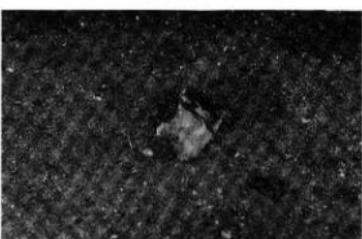
E区据立柱柱状柱穴列



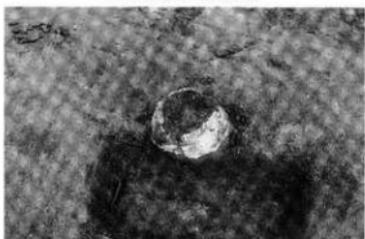
E区作業風景



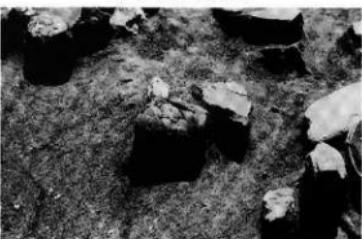
B区遺物出土状況①



B区遺物出土状況②

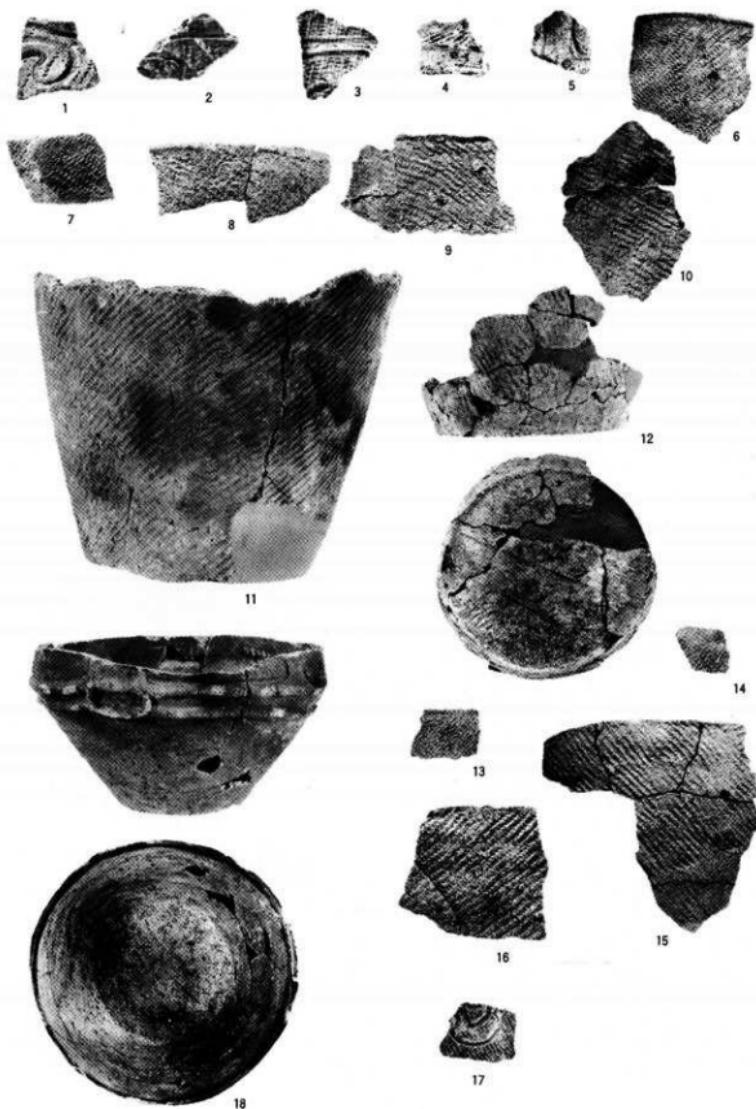


C区遺物出土状況（土器78）

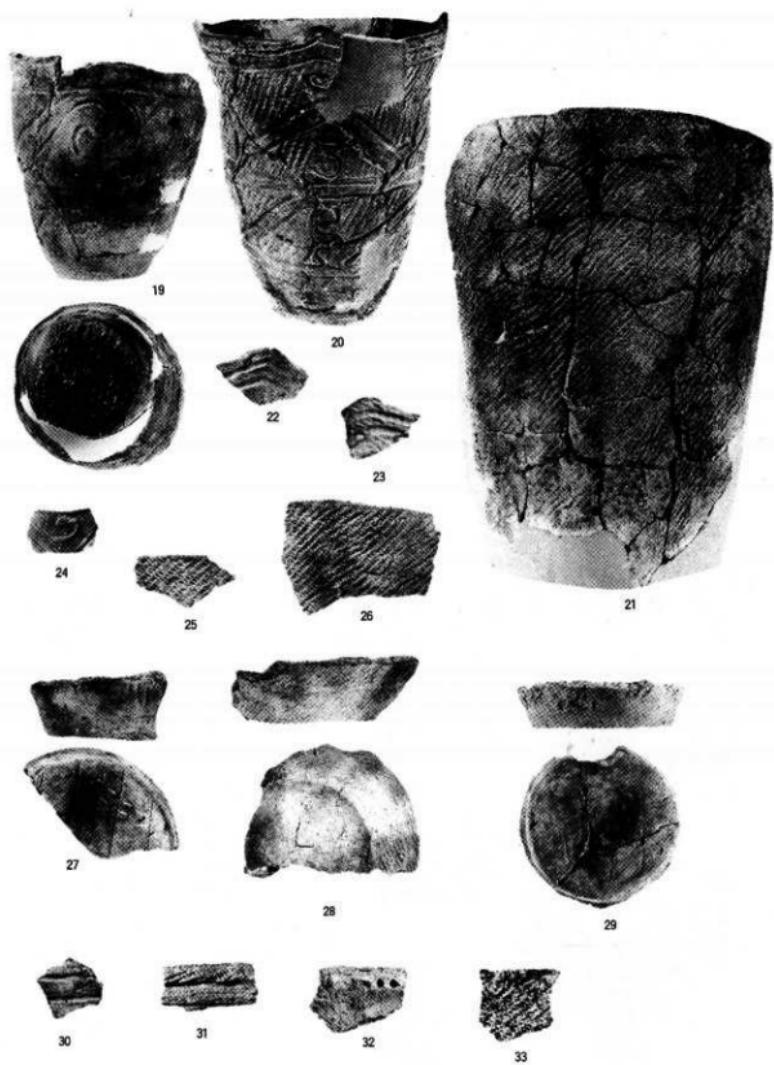


E区遺物出土状況（土器19）

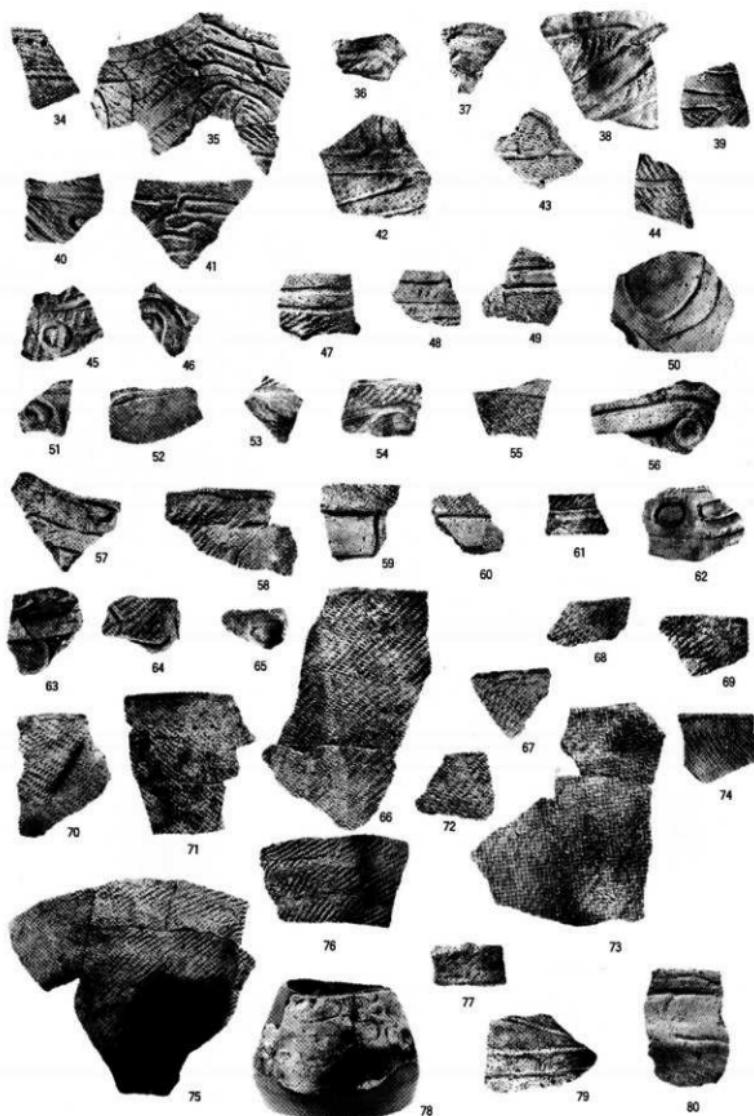
写真図版11 柱穴② 遺物出土状況



写真図版12 遺構内出土土器①



写真図版13 遺構内出土土器②

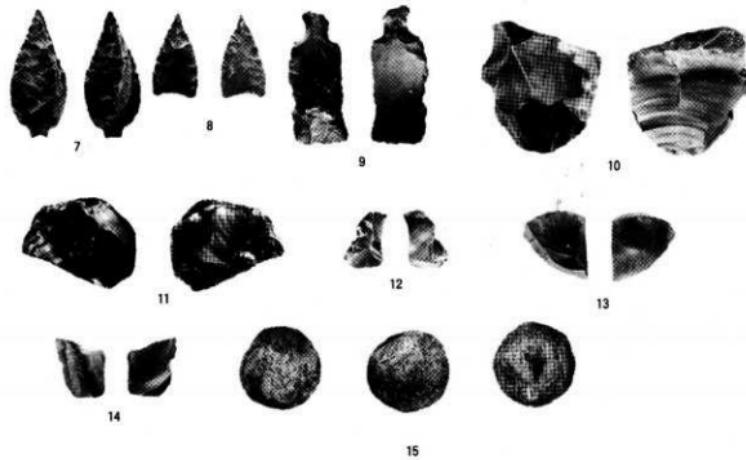


写真図版14 遺構外出土土器

土製品



石器



写真図版15 土製品・石器・石製品

報告書抄録

ふりがな	やがみいせきはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	矢神遺跡発掘調査報告書						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書						
シリーズ番号	第339集						
編著者名	鳥居達人 佐々木清文						
権利機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001						
発行年月日	2000年3月24日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
矢神遺跡	いわてけんにのへし 岩手県二戸市	032 13	JF-00 2114	39度 38分 57秒	141度 56分 29秒	1999 4.6 -5.31	1465m ²
	ふくおかあざやがみ 福岡字矢神						
	調査原因	二戸市緊急地方道整備事業川又地区に伴う緊急発掘					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
矢神遺跡	縄文時代集落跡	縄文時代	堅穴住居跡3棟 炉跡1基 土坑7基	縄文土器 後期初頭～前葉 石器	出土土器は 前十腰内式が 大半を占める		
		中世 その他	堅穴建物状1棟 柱穴142基 墓壙3基	石鐵・石匙・搔器 人骨3体	人骨は埋葬 した		

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	佐藤 基	子ヨ重
副所長	佐伊 藤直司	門紀介身澄幸一徹稔子計悟務光之琢郎郎昭彦聰香彦規忠和徳微
(管理課)		
課長	川 清多睦	與右衛門重義貞眞芳眞
主査	立浪花影	佐雅雅
事主	日德志夫	昭浩忠昭
(調査第一課)		里義俊佳里賢
課長	小田 普清宗	
課長補佐	田野 佐酒	
主任文化財専門調査員	木井 小山	
ク	内田 中吉	
文専門調査員	田中 吉謙	
ク	田原 笠	
ク	居田 小鳥	
ク	佐安 濱佐	
ク	木戸 道安	
ク	小野 阿千	
ク	阿子 羽高	
ク	高佐 菅	
ク	祐半 朝菊	
ク	村本 莎莉	
ク	中丸 本中	
ク	九佐 平	
ク	佐平 北江	
付員	幸	
(調査第二課)		
課長	佐藤 新佐々	
課長補佐	島田 ト	
主任文化財専門調査員	木尾 恵ト	
ク	藤新佐々	
文専門調査員	高古阿松	
ク	高小工	
ク	古前金	
ク	岩早佐	
ク	坂晴星	
ク	木山佐	
ク	木澤星	
ク	木沢木	
付員	谷田原川	
期門	木澤谷	
限職	木澤谷口	
付員	熊吉藤吉	
期門	北金鈴	
限職	平布山	
付員	山熊吉	
期門	吉藤吉	
限職	藤吉	
付員	佐藤吉	

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第339集

矢神遺跡発跡調査報告書

二戸市緊急地方道整備事業川又地区関連遺跡発掘調査

印刷 平成12年3月17日

発行 平成12年3月24日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (019) 638-9001

印刷 株式会社 長内印刷

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ三丁目3-28

TEL (019) 643-5343

